

平成三十一年（二〇一九）三月二十八日発行  
『大倉山論集』第六十五輯 抜刷  
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

# 世の為に田を耕す〜大倉家三代の生き方〜

―第三十八回研究所資料展の報告を兼ねて―

星 原 大 輔

# 世の為に田を耕す〜大倉家三代の生き方〜

## ―第三十八回研究所資料展の報告を兼ねて―

星原大輔

### 目次

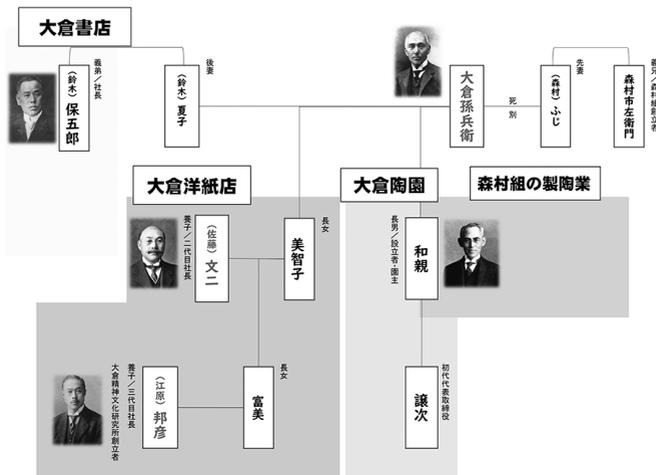
#### はじめに

- 一 大倉家三代とは―陰徳を積む―
  - 二 大倉孫兵衛―正直誠実、信念の人―
  - 三 大倉孫兵衛の企業経営
  - 四 大倉孫兵衛の社会貢献
  - 五 大倉文二―徳行の紳士―
  - 六 大倉文二の企業経営
  - 七 大倉文二の社会貢献
  - 八 大倉邦彦―実践躬行の人―
  - 九 大倉邦彦の企業経営
  - 十 大倉邦彦の社会貢献
- おわりに―大倉家三代にみる理念―

## はじめに

大倉洋紙店の三代目社長であった大倉邦彦（以下、邦彦）は、精神文化事業として大倉精神文化研究所の設立を計画し、研究所の本館（現大倉山記念館）を昭和七年（一九三二）四月九日に竣工した。莫大な建設費用はすべて、施主である邦彦の私財によってまかなわれた。彼はこの他にも富士見幼稚園や農村工芸学院などの学校を立ち上げるなど、教育事業にも積極的に取り組んでいる。その背景には、企業経営で得た利益は「国家社会を繁栄させる肥料」としなければならぬという強い信念があった。こうした企業家としての生き方は、大倉洋紙店の創業者で義祖父の大倉孫兵衛、そして二代目社長で義父の大倉文二、さらには大倉陶園創業者の大倉和親、孫兵衛から大倉書店を受け継いだ大倉保五郎など、大倉家の人びとに共通して見られた。

当研究所では平成二十八年度より、「実業家の社会貢献とその理念」をテーマに大倉山講演会などを企画し、様々な近代日本の実業家を取り上げ、社会貢献活動の具体的な実態とその思想的背景について検討してきた<sup>①</sup>。その間、邦彦だけではなく大倉家の企業経営と社会貢献の実態、そして彼らを突き動かした信条・理念について調査、検討してきた。そこで今回、その成果を紹介する研究所資料展「世の為に田を耕す〜大倉家三代の生き方〜」を開催した。期間は平成三十年（二〇一八）十一月一日（木）から平成三十一年二月二十八日（木）までで、会場日数は八十一日、期間中の入場者数は延べ二千六百二十八人であった。なお展示の企画及び本稿の執筆にあたって、青山大学資料センター、株式会社大倉陶園、国立国会図書館、佐藤カツエ氏、宗教法人道会、中央区立京橋図書館、学校法人高千穂学園、日本女子大学成瀬記念館、森村商事株式会社、早稲田大学図書館から資料提供等の協力を仰いだ。ここに改めて



【図1】大倉孫兵衛を中心とした大倉家の系図

大倉精神文化研究所作成（参考『大倉邦彦伝』など）

世の為に田を耕す〜大倉家三代の生き方〜（星原）

厚く御礼を申し上げます。

本稿では展示内容を若干修正し、かつ展示で使用できなかった資料も交えて、大倉家三代の企業経営と社会貢献を概説し、最後に彼らに共通する思想的背景を検討する。なお書簡等の原資料を引用する際には、旧漢字は常用漢字に改め、適宜句読点を付した。

### 一 大倉家三代とは―陰徳を積む―

戦前の日本における財閥の一つに、大倉喜八郎きはちろうが創設した大倉財閥がある。現在でもホテルオークラや大倉集古館など、この財閥の流れを汲む関係企業や文化施設には「大倉」の名が残っている。そのため、当研究所と大倉財閥の関係をしばしば問われるが、大倉財閥とは全く関係がない。

今回取り上げた大倉家三代とは、大倉孫兵衛を祖とする大倉家のことで、孫兵衛、その婚養子の大倉文二、そして文二の養子で、当研究所創立者の大倉邦彦を指す。この三人は孫兵衛が創業した大倉洋紙店の経営者である。さらに孫兵衛の長男・大

倉和親（大倉陶園など）、義弟・大倉保五郎（大倉書店）も孫兵衛が立ち上げた企業を引き継いでいる。これは、孫兵衛の次のような考えに基づいている。

天恩に報ゆるために稼ぎ、其の結果として出来た財産を、吾々老人は如何に処分して善いか（中略）永い間、苦心し、奮闘して財を造つた人々には、色々な経験があらうから、ソレから考へて、無私無欲な所で、何にか国家の為に成りソウな事業を考へ、ソレを起業して置いて子孫に譲らば、子孫もソレによりて有益な事業を営むることが出来、ただ財産を譲られた子孫の様に墮落する恐れは尠ない<sup>③</sup>。

彼らの名前は、現在ではひろく知られていないけれども、いずれも経営実績を挙げて、重鎮として斯業界を牽引した実業家であった。そして彼らは企業経営で得た利益を社会へと還元すべく、さまざまな社会事業や教育事業への援助を惜しまなかった。その足跡は今も各所に残っているが、「陰徳を積む」を旨としていたことから、当時からあまり知られていなかった。しかし月日は流れ、関係者の証言や資料の公開などによって、少しずつ明らかになってきている。

そこで次節以降、大倉家三代―孫兵衛、文二、邦彦―の企業経営と社会貢献の実態を概説していききたい。

## 二 大倉孫兵衛―正直誠実、信念の人―

大倉孫兵衛（以下、孫兵衛）は、天保十四年（一八四三）三月八日、江戸四谷伝馬町にあった絵草紙屋「萬屋」の二代目四郎兵衛の次男として生まれた<sup>①</sup>。幼名は和三郎。後述するように、彼は絵草紙販売から総合出版社へ、さらに紙問屋、製陶業へと、事業を大きく展開させた。そのきっかけとなったのは、六代目森村市左衛門（一八三九―一九

一九)との邂逅であった。安政六年(一八五九)頃、孫兵衛が錦絵を外国人に売るため横浜へ赴いた際、市左衛門と出会った。その後市左衛門の妹と結婚し義弟となり、公私にわたって親交を深めていった。

市左衛門は代々続く江戸の武具・馬具商の生まれで、横浜開港後は旗本や大名家から注文を受け、服や靴、時計などの舶来品を外国人から仕入るようになった。受注先のひとつが中津藩奥平家で、ここで福澤諭吉と出会う。市左衛門は横浜へ行くにつれて、日本の金が海外へ大量に流出していることに気づき、危機感を募らせた。福澤にそのことを相談したところ、日本製品の輸出を通じて外国人が持つていく金を取り返すことを提案され、貿易事業に乗り出すことを決意した。かくして明治九年(一八七六)、市左衛門は貿易会社「森村組」(現森村グループ)を立ち上げたのであった。孫兵衛は創立当初から参画し、森村組の発展に尽力した。市左衛門は次のように語っている。

或る日私が氏〔大倉孫兵衛、以下、引用文中の「」は筆者注〕を訪れて、具さに貿易事業に関する自分の決心を談じた。日本の金銀は遠からず外国に吸取せられて仕舞つて、遂には衰亡の悲運に陥る外はない。故に予は外国貿易を盛んにし、已に取り去られた金銀を回収して国家富強の基礎を固めたいと云ふ考へであると話した。孫



【図2】大倉孫兵衛

大倉精神文化研究所蔵 資140

兵衛氏は大に予の志に賛成して、早速予と共に力を尽して貿易事業に従事しやうと云ふ談を定めた。それから孫兵衛氏は自分の店は一切番頭に任せて置いて、一厘一銭の給料も取らずに毎日々々予の店に来て働いて呉れられた。(中略)元来氏は非常の勉強家で、仕掛つた仕事は、夜が二時になつても三時になつても、仕舞はなければ休まないと云ふ気風の人で、その根気の強い事には、(中略)予の励ましとなつた事も度々であつた。(5)

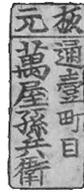
孫兵衛はそれまで培ってきた経験を生かすとともに、森村組での仕事を通じて新しい知見を得たことで、事業を大きく展開させていくこととなる。

### 三 大倉孫兵衛の企業経営

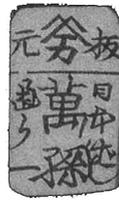
#### (一) 版画から版本へ―錦絵と草双紙・画譜

文久三年（一八六三）、父・大倉四郎兵衛が亡くなると、兄・由二郎が三代目四郎兵衛となり、浮世絵版画などを扱う地本問屋「萬屋」<sup>（よろずや）</sup>を継いだ。弟の和三郎は従弟の養子となり、三代目孫兵衛を名乗り兄の家業を助けた。これとは別に、自分の店舗を日本橋のたもとに構え、「萬屋」の屋号で錦絵の販売をはじめた。ただし、明治十三年（一八八〇）三月に東京商法会議所へ提出された議員推薦状には、「初年より書籍取扱ひ罷在候処、文久二年中当地江書籍及錦絵双紙商売開店致し、当時商業永統罷在候也。」と記された履歴書が添付されている。<sup>（6）</sup>したがって、父親が亡くなる前から商売を始めていた可能性があることも指摘しておきたい。

その後、孫兵衛は販売だけではなく、企画を立てて絵師に下絵を依頼するようになった。彼が手掛けた錦絵は、「大倉孫兵衛出版錦絵目録」<sup>（7）</sup>で六百四十四点が確認されていたが、近年孫兵衛自ら整理したと推定される画帖七冊が見つかると、いまだに総数は確定できていない。<sup>（8）</sup>現在もとも古いとされているのは、慶応三年（一八六七）八月の「騎兵体歩兵体大調練之図」<sup>（9）</sup>（絵師…二魁齋芳年（月岡芳年））で、「板元 日本橋通一丁目 大倉孫兵衛」の版元印がある。ほぼ同じ構図の「騎兵体歩兵体散兵大調練之図」<sup>（10）</sup>も存在しているが、こちらの版元印は「萬屋孫兵衛」となっている。明治九年（一八七六）頃までの錦絵には、「板元通壹丁目 萬屋孫兵衛」「版元 日本ばし通り一 萬孫」



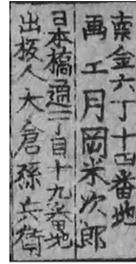
1



2



3



4

【図3】 萬屋発行の錦絵にある版元印

1. 明治2年、当勢三十二想
2. 明治5年、博覧会諸人群集之図
3. 明治6年、東京第一大学区開成学校開業式之図
4. 明治9年、明治小史年間紀事 熊本暴動賊魁討死之図。  
(いずれも国立国会図書館デジタルコレクションより)

「日本橋通壹町目 萬屋孫兵衛 梓」といった版元印があることから（図3）、明治初期には「萬屋孫兵衛」「萬孫」の名前の方が知られていた。なお、【図3】2の版元印上部にある商標は「鍵萬」と呼ばれている。

孫兵衛はじめ歌舞伎役者

の姿を描いた役者絵や美人画を手掛けていたが、次第に文明開化の様子を伝える開化絵や東京などの名所を描いた風景画を企画するようになっていく。例えば、横浜絵の一つである「横浜海岸鉄道蒸気車図」では、明治五年（一八七七）横浜・新橋間で開通した日本最初の鉄道が描かれている。明治十年（一八七七）の第一回内国勸業博覧会で出品陳列された「大日本物産図会」では、北海道から九州にいたる全国各地の特産品や、その生産に携わる人々の姿がいさいぎと描かれている。新聞雑誌の普及がまだ進んでいなかった明治初期、錦絵はニュース・メディアの役割も果たしていた。明治十年に勃発した西南戦争中には約六百種もの錦絵が摺られていたが、孫兵衛も多くの西南戦争錦絵を販売している。

萬屋の錦絵は人気が高く、明治十二年（一八七九）の『諸品商業取組評』に収録された「錦絵 東京繁盛」の番付では、最高位の東「大関」に位置づけられている<sup>1)</sup>。その理由の一つは彫摺技術で

世間同業の錦絵は年月を経る中に変色するのが常であるに引換へ、大倉の店から出るものは、幾十年の今日依然として色彩鮮明、曾て変色褪色の迹を認めない。これには其道の玄人も舌を巻いて嘆称するのである。<sup>12)</sup>

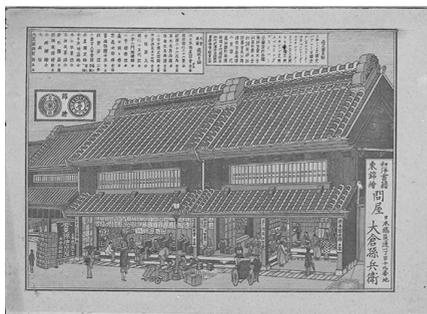
と評されている。これは昭和十八年（一九四三）当時の文章であるが、現存する錦絵はいまも色鮮やかなものが多い。そして孫兵衛は明治七年（一八七四）頃に「錦栄堂」を創立し、萬屋と同じく「日本橋通壹丁目十九番地」に店舗を構えた。<sup>13)</sup> 錦栄堂では当初娯楽的な草双紙（絵と文が一体化した和装本）を出版販売していたが、明治十年代半ばから模様や花鳥風月などを載せた美術性の高い画譜を次々と刊行した。その一つが『榎嶺百鳥画譜』で、その広告に

我國の物産は尽く美術を以て外国の名譽を得たり。所謂陶器時絵金銀銅細工木竹牙彫刻織物等にて、其模様は必ず花鳥の美なるを好めり。然れども其原本とすべき上品なる画譜に乏しく、文人の画譜は模様に適せず。依て純粹の四条家にて方今西京に名ある榎嶺氏に乞ふて我が国産に的当の画譜なれば、美術の職工は必ず一本を机辺に備へて扮本とすべき珍書なり。<sup>14)</sup>

とあるように、画譜類は輸出用商品の絵付けのテキストとする狙いがあった。<sup>15)</sup> 孫兵衛が森村組で貿易業に携わっていたからこそ生まれた着眼点と言えよう。榎嶺とは幸野榎嶺<sup>（こうののばらい）</sup>のことで、竹内栖鳳<sup>（たけのうちせいほう）</sup>ら多くの優秀な門下生を輩出した京都の日本画家である。錦栄堂（のち大倉書店）からは、花鳥に着色を施した『榎嶺花鳥画譜』、草木花鳥・山水森羅万象を細画した『工業図式』、様々な菊を描いた『榎嶺菊百種』を刊行している。

## （二）業界を代表する出版社へ―大倉書店の創業

明治十九年（一八八六）、孫兵衛は萬屋と錦栄堂を一本化し、独自企画の出版と店頭販売を兼ねた大倉書店を創業した。<sup>16)</sup> 戦後すぐに店を畳んだため、今やその名を知る人は少ない。しかし戦前の出版業界を代表する会社であった。



【図4】明治20年前後の大倉書店

沿革史資料No.12645-30

左上の印は、明治14年(1881)の第二回内国勲業博覧会で授与された「有功三等」の賞牌である。



【図5】大正初期の大倉書店

沿革史資料No.12724-15

正面奥の建物が大倉書店の本店。左端の石造の橋は日本橋。

大手出版社の一つで、諸橋轍次編『大漢和辞典』などを刊行する大修館書店の「大」の一字は、創業者の鈴木一平が大倉書店の出版方針に共鳴し継承しようと考えて付けたという。<sup>17)</sup>  
店舗は従来通り「日本橋通二丁目十九番地」に置かれ、木造平屋の左側で錦絵を、右側で書籍を販売していた(図4)。そして日露戦争後に市区改正の一環として日本橋大通りの拡幅が決定したため、それに伴って店舗は改築される。新本店である木骨造の四階建ビルは、明治四十一年(一九〇八)に竣工した。新築落成を記念した特価販売の広告には、

今般漸く竣工仕候に就ては営業の部に大拡張を行ひ、販売方法も陳列式として御随意に御望みの図書物品を御選択相成様改良仕候に付、賑々敷御来観の上御購求被下度。<sup>18)</sup>

とある。当時の新聞でも、一階の商品陳列場や外の飾り窓などは「和洋折衷にて成功せしもの」で、「大津唐物店、三越、松屋等其模範とすべきもの」と評価された<sup>19</sup>。しかし明治四十二年（一九〇九）八月十六日早朝、三階の食事室より出火した。当時の消防技術では三階以上の高さまで放水することができず、本店の二階の一部と三階、四階が全焼した<sup>20</sup>。そのため、翌四十三年六月に二階より上の部分は建て替えられた<sup>21</sup>（図5）。翌年に日本橋が石造二重アーチに架け替えられた際には、五百人近い人びとがビルから開通式の様子を観覧するなど、大倉書店の本店ビルは日本橋通りを象徴する建物の一つとなった。

### （三）社会に有益な書籍を―大倉保五郎の出版事業

大倉書店を大きく発展させたのは孫兵衛よりも、義弟の大倉保五郎の力によるところが大きい。保五郎<sup>22</sup>は安政四年（一八五七）五月四日に千葉県木更津の鈴木家に生まれた。姉の夏子が孫兵衛の後妻であったことから、明治八年頃から孫兵衛の下で働き、のちに孫兵衛の母さとの養子となった。



【図6】大倉保五郎

大倉精神文化研究所所蔵 資  
140

孫兵衛は明治二十年前後から書店経営を保五郎に委ね、明治三十五年（一九〇二）十月に経営権を完全に譲り渡した<sup>24</sup>。保五郎は孫兵衛の期待に応じて堅実な経営を行い、独自の印刷工場と製版部を設置し、出版業界を代表する会社へと成長させた。

また彼は戦前の出版業界を牽引した人物でもあった。図書を扱う業者が参加する最大団体「東京書籍商組合」で、明治二十五年（一八九二）から四十六年間も委員・評議員を務め、その間、副組合長を八年、

組長を十四年務めている。このほか、東京出版協会会長や東京商工会議所議員なども歴任した。

大倉書店からは多くの書籍が出版されたが、もっとも著名なのは夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』の初版本（上編・明治三十八年（一九〇五）十月、中編・明治三十九年十一月、下編・明治四十年五月）であろう。同書は大倉書店と服部書店による共同出版となっている。服部書店は京橋区銀座三丁目九番地で書籍の店頭売りりと独自企画の出版を営んでおり、社長の服部国太郎はかつて大倉書店で働き、明治三十年初めに独立した。<sup>(25)</sup>

漱石が大倉書店と服部書店を選んだ理由の一つは「販売力の点でもバックアップが必要であったし、大倉という大看板が付くこと」であったと推測されている。<sup>(26)</sup> また漱石は中村不折なかむらふせうに挿絵を依頼した際に、次のように書き送っている。

偕今回ホト、ギス所蔵の拙稿を大倉書店で出版致し度と申すについては、其内に挿画を入れる必要有之、之を大兄に願ひ度事、小生も書肆も一様に希望につき、御多忙中甚だ御迷惑とは存じ候へども御引受け被下間敷や。実は製本も可成美しく致し美術的のものを作る書店の考につき、君の筆で雅致滑稽のものをかいて下されば幸甚と存候。猶委細は此手紙持参の番頭より御聞取被下度。条件も同人と御とりきめ願候。

「可成美しく」「美術的のものを作る」という大倉書店の経営方針、そして前身である萬屋・錦栄堂から積み上げてきた実績が、やはり漱石の選択を後押しした要因であったと言えよう。

しかし大倉書店がもつとも力を入れたのは文芸書ではなく、世の中の進展に伴って変貌し続ける社会を生き抜く上で役立つ実用書の刊行であった。大修館書店創業者の鈴木一平の伝記に

当時の大倉書店（中略）は、『言泉』とか『仏教大字典』等後世に残るような大きな仕事をやっていた。この大倉書店の出身であった辻本〔末吉〕氏が修学堂では、どちらかという目先の利に走る商売が寧ろ得意であった



【図7】落合直文『ことばの泉』和装全5冊

沿革史資料No.12741

返し、明治四十年（一九〇七）九月には第三十二版が刊行されるに至っている。<sup>(20)</sup>この他、独和辞典、仏和辞典などの外国語辞書も刊行している。

ついで明治三十一年（一八九八）、国語辞典として『ことばの泉』を刊行した。<sup>(30)</sup>見出し語は五十音順で、収録されている項目は人名・地名などの百科的なものが多く、八百余箇もの挿図が掲載されている。また、いろは順と漢字画数の索引が付けられているのも特徴であろう。のちに芳賀矢一<sup>(31)</sup>を中心に増補版が企画され、『言泉』（大正十年）と書

ようで、例えば紙型を買うとか、虎の巻出版に力を注いだり、後世に残るような出版は残念ながら我々も聞いてない。故人（鈴木一平）は、寧ろ目標としては大倉書店の出版理念で、主人辻本氏の出版方針ではなかった。<sup>(32)</sup>

とある。大倉書店が刊行した外国語や国語・漢語の辞書類は大変人気を博した。

その一つが、明治二十年（一八八七）に刊行された島田豊纂<sup>(33)</sup>訳『和訳英字彙・附音挿図』である。『ウエブスター辞典』を基に編纂された英和辞書で、日本ではじめて七号活字で印刷された。

「語言の豊富・体裁の美・携帯の便」<sup>(34)</sup>が受けて初版はすぐに売り切れ、その後も増補や改訂を繰り返す。

名を改めて刊行された。

大倉書店は順調に業績を伸ばしていたが、大正十二年（一九二二）の関東大震災で本店ビルが倒壊焼失した。保五郎は日本橋区南茅場町に仮営業所を設け再建を期したが、果たせぬまま昭和十二年（一九三七）四月十七日に病死した。享年八十一。保五郎の後を継いだ章雄は昭和二十年（一九四五）二月に亡くなり、二十代になったばかりの樹一郎が次の社長となった。

その直後の三月、南茅場町にあった店舗及び印刷所は東京大空襲で全焼してしまったため、店は京橋区湊町三丁目一二番地に移った。書店再興を目指した樹一郎は、保五郎からの出版方針を受け継ぎ、「文学もの」ではなく、林鶴一・国枝元治『方程式』（昭和二十一年九月）、山下太作『図解建築さしがね使ひ』（昭和二十二年一月）など、実用性の高い書籍の出版に努めていた。<sup>31</sup>しかし昭和二十四年（一九四九）八月刊行の佐藤彰美原著・大倉書店編輯部編『初等木造図解建築常識』を最後に、大倉書店から出版された書籍は確認できない。おそらくその後まもなく、大倉書店の歴史は終わりを迎えたのであろう。<sup>32</sup>

#### （四）大倉洋紙店の創業

明治になり活版印刷、平版印刷が普及するにつれて、書籍の装丁も和装から洋装へと変わっていく。従来用いられてきた和紙は、印刷すると色が沈んだり滲んだりするため、洋紙の需要が急速に高まった。明治七年（一八七四）に日本最初の製紙会社・有恒社が誕生したが、国内の生産量は少なく、外国からの輸入がほとんどであった。

そこで大倉書店を立ち上げていた孫兵衛は、洋紙の輸入を扱う事業を始めるべく、明治二十二年（一八八九）十一月三日に紙問屋を創立し、それまで錦絵を販売していた大倉書店の正面左側を店舗とした（**図8**）<sup>33</sup>。実質的な経営



【図8】大倉洋紙店と大倉書店 明治30年代

出版協会編輯局編『廿世紀之東京』（出版協会、明治39年）口絵  
（画像提供：中央区立京橋図書館）

は、親族の岩崎清吉が指揮を執った。

【図8】の看板に「大倉洋紙店」とあるが、明治四十二年（一九〇九）九月に発行した、岩手県盛岡市の木津屋（現株式会社木津屋本店）宛の為替手形には「大倉孫兵衛洋紙店」と記されている<sup>34</sup>。社名が大倉洋紙店に統一されたのは明治四十年代前半、二代目社長の文二が経営権を引き継いだ頃と推定される。

#### （五）貿易で日本を豊かに—製陶業の発展

孫兵衛は家業である出版関係の事業を親族に任せ、森村組の、特に製陶関係の事業に力を入れていった。最初はアメリカへ輸出する日本製骨董雑貨類の仕入れを担当した。その仕事ぶりは、次のように評価されている。

雑貨の仕入れにおいてはほとんど無類の名手と称すべし。その雑貨の真贋を別つことさながら神のごとく、かつ評価の巧なるその品種の何たるを問はず、一見断定すれば必ず急所に命中し、本職をして驚嘆措くあたはざらしむるものありといふ。森村組の商品が非常なる信用をもって米  
国に売行きつゝ、あるのも、大倉氏の鑑識大いにあずかつて力なくんばあらず<sup>35</sup>。

孫兵衛はどの仕事に関しても一貫して品質にこだわったが、それは「天理に叶ひ、信用も増し、必ず繁盛して、盛大の仕事をする様になる」という信念からであった<sup>36</sup>。

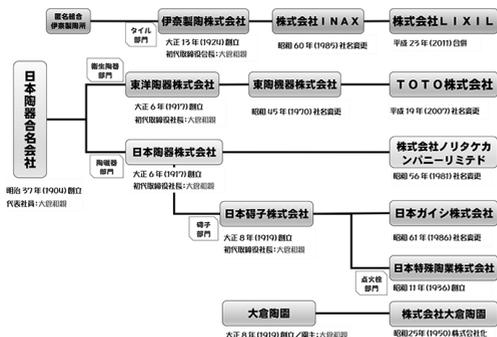


【図9】大倉和親（左）

沿革史資料 資140

【図10】和親が関与した製陶企業（下）

大倉精神文化研究所作成（参考：株式会社大倉陶園 HP など）



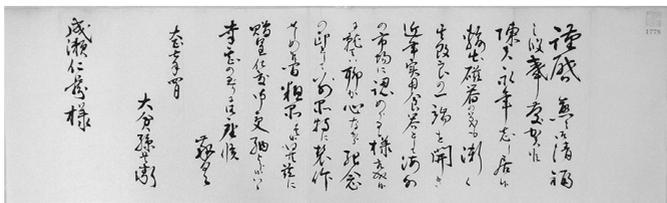
その後、森村組は輸出用陶磁器の独自開発に着手し、孫兵衛がその責任者となり、明治二十六年（一八九三）にシカゴ・コロンプス万国博覧会を視察して、洋食器の開発生産に取り組みようになった。そして明治二十九年のある日、アメリカから食卓用食器揃（テーブルウェア）の注文があり、孫兵衛は西洋並みの純白硬質磁器で作り上げようと考えた。

しかし技術開発は非常な困難を極め、先行きが見えぬ膨大な経費が見込まれたため、森村組の内部からも反対の声があがった。明治三十六年（一九〇三）、孫兵衛は状況を打開するためヨーロッパ視察を計画する。その際、

予が今回の視察にして幸に事成るべしとの信念を得ば仮令同志の異議ありとも、奮つて多年の宿志を断行せんとす。断行の後事若し成らずんば其責任は我一人に在り、家財を尽して後止むの覚悟なからざる可からず。今日一家安泰の生活も翌朝或は一夢たらんも亦期し難ければ、予め一族の覚悟を問ふ。

と家族に決意を伝えた。これに対して家族一同は、「宿志を行ふに何等悔ゆること」が無いようにと答えたという。<sup>37</sup>

このヨーロッパ視察で、孫兵衛ら一行は最新の焼成方法の技術を習得するなどの成果を挙げた。そこで森村組は新工場の設立を決定し、明治三十七年（一九〇四）愛知県則武に



【図11】成瀬仁蔵宛大倉孫兵衛書翰 大正7年（1918）4月

日本女子大学成瀬記念館蔵

日本陶器合名会社（現株式会社ノリタケカンパニーリミテド）を創業した。代表社員（社長）に就いたのは、孫兵衛の長男で、まだ二十九歳の和親であった。

孫兵衛の製陶業を実務の面で支えたのが、和親である。明治八年（一八七五）十二月十一日に生れ、明治二十七年（一八九四）に慶應義塾本科を卒業すると森村組に入社し、幹部となった。その後「いかなる事業も二兎は追わずに一つの経営に専心すべき」という「一業一社」の経営方針から、森村組の製陶業のうちいくつかの部門は、独立し株式会社化されたが、いずれも和親が初代社長を務めている（【図10】）。社名等が変わっているものもあるが、これらの企業は今も続いているように、和親は日本陶器事業の発展に大きな功績を残した。

その後も純白硬質磁器の技術開発は続けられ、最終的に完成したのは大正二年（一九一三）七月、孫兵衛の決意から約二十年もの歳月が経っていた。

【図11】は、孫兵衛が特別に作らせた食器類を、日本女子大学創立者の成瀬仁蔵なるせじんざうに贈った時の添状である。

（前略）永年志し居候焼出磁器の義も、漸く其改良の一端を開き、近年実用食器として海外の市場に認めらる、様相成候に就ては、聊か心ながら記念の印として別品特に製作せしめ候間、粗品に者候得共茲に贈呈仕度。御受納被下候ハ、幸甚の至りに御座候。（後略）

文章の端々に孫兵衛の喜びがうかがえよう。しかし孫兵衛は「海外の市場で認められ

たこと」で満足せず、さらに「国内でよろこばれ、外国で驚かれるような品」を追求しようとした。七十六歳の孫兵衛は大正七年（一九一八）七月、新しい高級美術陶器工場の設立に着手する。その理念を、以下のように記した。<sup>39</sup>

是は利益を期して工場を起す事出来ず。寧ろ道楽仕事につき一人の独業として他に迷惑を掛けぬ趣向でなければ思ふ様な道楽は出来ぬ。

依て他に關係なく独立にて作るを良とするものなり。

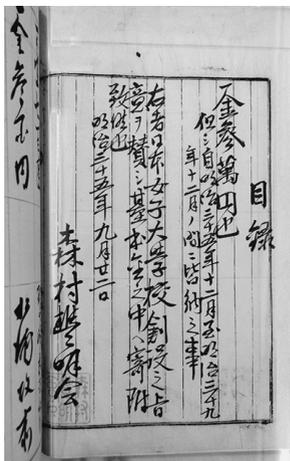
全く商売以外の道楽仕事として、良きが上にも良き物を作りて、英国の骨粉焼<sup>ボーン・ペース</sup>、仏国の「セーブル」、伊国の「ジノリー」以上の物を作り出し度し。

利益を思ふてはとて此事は出来ぬ故、全く大倉の道楽として此上なき美術品を作り度し。既に蒲田に一万三千坪許りの地を買入れたるにつき、此地に工場と共に別荘の如き見本場を作り、花壇も作り、工場からして美術の工合に作り度き事、此事は万事和親に任せ、日野氏茲に来て図案設計を始める。

大正七年七月十八日

大倉孫兵衛 手記 時年七十六

この工場が現在の株式会社大倉陶園である。孫兵衛は初窯の製品を見ることなく、大正十年（一九二二）十二月十七日に死去したが、和親がその遺志を引き継ぎ、平成三十一年（二〇一九）に大倉陶園は創業百周年を迎えた。この間、岡染やエンボスなどの陶園独自の技法が生み出され、「良きが上にも良き物を作りて」という孫兵衛の理想は今も受け継がれている。



【図13】 豊明会の目録  
 「日本女子大学校寄附金簿」  
 日本女子大学成瀬記念館所蔵



【図12】 森村豊、森村明六と  
 （画像提供：森村商事株式会社）  
 左から森村豊、森村明六、孫兵衛。  
 明治26年（1893）のシカゴ・コ  
 ロンプス万国博覧会を視察した  
 際に撮影したと推定される。

#### 四 大倉孫兵衛の社会貢献

##### （一）女子教育の発展のためにー日本女子大校

前述してきたように、孫兵衛は事業を大きく展開し、実業家として成功を収めた。そしてその収益を基に社会貢献を行っていたが、成瀬仁蔵が「森村〔市左衛門〕さんとか大倉〔孫兵衛〕さんとか云ふ方は自分の名前を出す事を余り御好みにならぬ<sup>40)</sup>と語っているように、その実態を知り得るがかりは少ない。今回、関係各所を調査することで判明した事例を紹介したい。

まず、日本女子大学校（現日本女子大学）との関係である<sup>41)</sup>。きっかけは、明治三十四年（一九〇一）、森村組幹部によつて設立された森村豊明会（以下、豊明会）であった。明治三十二年、森村ブラザーズの基礎を築いた森村市左衛門の弟・豊と、将来を嘱望されていた長男・明六が、相次いで他界した。市左衛門は、豊が平素から「若し出来る身分になつたら、国家の為に金を投じ度い」と語っていたこ



【図14】 森村組幹部及び大倉家の自筆署名  
 「日本女子大学校寄附金簿」より

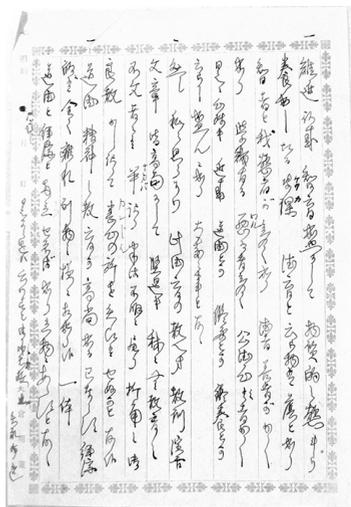
とから、この「奉公の精神」を引き継ぎ「公共の事業に寄附する」ことで、彼らの霊を慰め顕彰しようと考えた<sup>⑭</sup>。市左衛門のこの考えに賛同した森村組有志が資金を拠出し基金が作られ、豊明会は誕生した。

豊明会は今日までにさまざまな教育・公共団体への寄附活動を行ってきたが、最初の対象は日本女子大学校であった。市左衛門が同校の発起人・創立委員のひとりであり、早くから成瀬の教育事業を支援していたからである。日本女子大学成瀬記念館が所蔵する「日本女子大学校寄附金簿<sup>⑮</sup>」には、寄附金額・年月日・寄附者名（大部分が自筆署名）が記されており、そこに豊明会からの目録が貼り込まれている（図13）。これによって、明治三十五年（一九〇二）九月二十二日、「日本女子大学校創設之旨意」に賛同して「金参萬円」を「基本金」へ寄附したこと、また同

年十二月から明治三十九年十二月までの間に数回に分けて納入したことが明らかにあった。豊明会はその後も寄附を続けており、同校の教育学部の開設や附属小学校・幼稚園の設置、講堂・学生寮の建設などの資金となった。また前掲の「寄附金簿」と「資金として千円以上寄附金調<sup>⑯</sup>」によって、森村家と大倉家の人びと、そして森村組幹部の村井保固<sup>⑰</sup>は、個人でも寄附を行っていたことも確認された。

この他、市左衛門と孫兵衛は大学経営にも参画しており、明治三十八年（一九〇五）に日本女子大学校が財団法人となつてから亡くなるまで評議員を務めた。さらに市左衛門の妻菊子と孫兵衛の妻夏子も、OG組織である桜楓会を支援する補助団の一員であり、森村組と日本女子大学校との関係は非常に深かった<sup>⑱</sup>。

孫兵衛が成瀬に宛てた書翰には、「御以蔭<sup>⑲</sup>で金か世の中へ出て生て働く事と相成り、其決果が天の命ニ随ひ夫々富をつむ事ニ相成り、私共之幸福此上もなき難有事と奉存



【図15】 成瀬仁蔵宛大倉孫兵衛書翰 (一部)

明治45年(1912) 7月3日  
日本女子大学成瀬記念館蔵

候」<sup>(16)</sup>、あるいは「只々私共も同じ人類之中二生れ来たりし者二付、先生方之御配慮の九牛か一毛丈にて<sup>(17)</sup>もおてつだい仕り度く」と、惜しみなく援助する旨を伝えている。事実、孫兵衛夫婦は大学施設の整備充実にも協力している。

例えば、明治三十九年(一九〇六)四月に落成した大学図書館―豊明会の寄贈を記念して豊明図書館と命名―は、成瀬が孫兵衛に「我国に婦人の為の図書館がなくて誠に不便であるが」と相談したことが

きっかけであった。成瀬はその後も図面を持つて相談にたびたび訪れ、孫兵衛は「夫れでは小さいからもっと大きくして、天井は硝子を入れて明るくするがよかるー」<sup>(18)</sup>などと助言したという。また同年五月に開寮した幼稚舎(のちに曙寮)は、夏子による寄附であった。成瀬が「父母なき孤児」「父母が調和せぬ家庭に育つ子供」などのために「健全な発育を遂げしめる場所」、さらに「教育の改良、家庭の改良を研究する機関」の設置を企画したところ、夏子はその趣旨に賛同した。注目すべきは、彼女がこの寄附を「匿名」で行ったことであろう。<sup>(19)</sup>

孫兵衛夫婦がここまで日本女子大学校を支援したのは、成瀬宛の孫兵衛書翰を読み解くと、成瀬の人柄と教育思想に魅かれ、成瀬を通じてその思想が世の中に広く浸透することを期待していたからと推測される。明治四十五年(一九一二)七月、女子高等教育視察および婦一協会の趣旨を広めるため欧米諸国へ向かうとする成瀬に対して、孫兵衛は一通の書翰を寄せている(【図15】)。

文中で孫兵衛は、明治以降の教育は「智育盛にして物質的之態」ばかりで、その結果「智者と我慾者が多く成り、徳者善者が少く成り、学識有る悪<sup>ワル</sup>者多く、公德心之者少く」なっていると慨嘆している。しかし「富貴ニ成るニは道徳を守らねばいけぬ」「道徳と経済と両立せねば成り立物ニあらず」と考える彼にとつて、「道徳とか修身とか修養とか」徳育の重要性が見直されつつある当時の状況は望ましいものであった。ただその内容は「高尚にして堅過キ」ず、「素人無教育之者」にも分かりやすくしなければならぬ。成瀬にもこうした自分の考えを「御参考」に、今後も取り組んでもらいたいと伝えている。この他にも、孫兵衛は自分の考えをたびたび伝えている。

孫兵衛は成瀬が結成した婦一協会にも参加しており、孫兵衛の思想信条を考察していく上で成瀬の存在は見逃すことはできないであろう。

## (二) 万葉公園（神奈川県湯河原町）の由来―東京高千穂学校と大倉橋―

神奈川県西南端に位置する湯河原温泉は、海と山に囲まれた風光明媚な土地柄で、一年を通じて温暖な気候であることから、奈良時代から湯治場として知られていた。日本最古の歌集『万葉集』巻十四に収められている、東歌「相模国歌」の一首に「あしがりの<sup>(足柄)</sup>とひのかふち<sup>(土肥)</sup>に<sup>(河内)</sup>いづるゆのよにもたよらに<sup>(土肥)</sup>ころがいはなくに」とある。この和歌は湯河原温泉のことを詠んだと、国文学者の佐佐木信綱が考証している。これを受けて湯河原町は、温泉街中心のある一帯を町立公園として整備し、昭和二十六年（一九五二）に万葉公園と命名した。戦前、この公園一帯は大倉公園と呼ばれていた時期があった。そこがかつて孫兵衛の別荘地であったからである。現在でも、公園内には孫兵衛の別荘地であったことを伝える石碑が二基のこっている。

一つは、公園内にある熊野神社の近くにある養生園碑である（図16）。湯河原は日露戦争後に転地療養所が開設



【図16】養生園碑

平成30年（2018）7月撮影

『図録 高千穂学園80年史』（高千穂学園、昭和58年5月）に拓本が掲載されている。



【図17】養生園歌碑

平成30年（2018）7月撮影

下の絵葉書（「大倉公園入口」沿革史資料No.12724-8）は、大正期～昭和初期の養生園入口である。

され、多くの傷痍軍人が訪れた<sup>(52)</sup>。この時、孫兵衛は「瀧あり、池あり、花壇あり、奇巖随所に聳へ、樹木満庭に鬱蒼たり<sup>(53)</sup>」と評された別荘地を開放し、自由に散策できるようにしたという。これ以降、周辺地域の人びとはもちろん、森村組の関係者や交流のあった政財界および教育界の著名人が訪れるようになった。その一人が、東京高千穂学校（現高千穂大学）を創立した川田鐵彌<sup>(54)</sup>である。孫兵衛は川田の教育事業を支援し、同校の評議員を務め、講堂「晩香閣」を寄附するなどしている。川田は明治四十四年（一九一）九月に大病で入院し、のちに湯河原にある孫兵衛の別荘地で静養した<sup>(55)</sup>。その感謝の意を表すため、同時期に同じく湯河原で静養していた東郷平八郎<sup>(56)</sup>に篆額を依頼し、川田自ら撰文して、大正元年（一九一）十月に記念碑を建立した。

もう一つが、公園内の文学の小径入口近くにある養生園歌碑である（図17）。ここに刻まれている和歌「いつとも春風たえぬこの里に遊びて君が齡延ぶべし」は川田が詠んだと言われている<sup>(56)</sup>。この歌碑はかつて別荘地前に架けられていた石橋のたもとにあった。松村介石<sup>(57)</sup>も「山上散步随意」という標札を門前に掲げていたと記しているが、こ

の歌碑の上部にも「散歩随意」と刻まれている。なお【図17】下の絵葉書に写っている石橋は「大倉橋」と言い、孫兵衛に由来する。湯河原温泉街を流れる藤木川の橋は毎年のように洪水で流されていた。そこで孫兵衛は資金を提供して大きな橋を架けようとしたところ、地元の人たちが何もしないわけにはいかないと、彼らも資金と労働力を提供し、完成するに至ったという。<sup>(58)</sup>

この別荘地はのちに和親が温泉場区有地に寄贈し、現在万葉公園となっていることは記述した通りである。茶室や足湯施設が設けられ、初夏にははたるの宴や花菖蒲展が開催されるなど、今も多くの人がびとが訪れる憩いの場所となっている。

### (三) 道会への支援―松村介石―

孫兵衛は明治四十二年（一九〇九）脳溢血で倒れたが、一命はとりとめた。その入院中にある牧師から話を聞くうちに、キリスト教、聖書に関心を持つようになったという。そこで養子の大倉文二らを紹介し、松村介石と知り合った。松村は明治十年（一八七七）に洗礼を受け、キリスト教系学校の教師や基督教青年会の講師などを務め、内村うちむら鑑三かんざう、植村正久うゑむらまほひさ、田村直臣たむらなおみとともに明治基督教界の四村と呼ばれるほどの著名人であった。<sup>(59)</sup>

松村は明治四十年（一九〇七）に、キリスト教に儒教、神道、老荘、仏教を包含した宗教団体「一心会」（のちに日本教会、そして道会と



【図18】松村介石（右）と拝天堂（左）

（画像提供：宗教法人道会）

改称)を開き、翌年に機関誌『道』を創刊するなど、孫兵衛と出会った時は伝道活動を展開していた最中であった。孫兵衛は介石の思想信条に深く共鳴し、その支援を申し出た。その後、松村は明治四十四年(一九一二)に道徳団体「道の会」も組織し、機関誌『道話』を創刊した。その背景には多くの実業家の支援があったが、孫兵衛もその一人であった。そして孫兵衛は、それぞれの機関誌『道』『道話』に、実体験から得た自らの人生哲学に関する文章を数多く寄稿した。<sup>(6)</sup>

介石・道会への支援は、孫兵衛が亡くなるまで続いた。大正三年(一九一四)には、介石へ資金を提供して海外視察を実現させた。また、帰国した介石は大正四年十一月に道会の本部事務所を現在の渋谷区神山に移転し、翌年十二月に敷地内に礼拝堂「拝天堂」を竣工した。その棟札には「本館は道会最初の拝天堂にして、会員大倉孫兵衛氏の建立に係るものなり」と記されていたように、この他の施設も含めた建設費は、すべて孫兵衛が負担した。

介石は孫兵衛のことを、次のように評している。

事業に臨むと私事に処するとを問はず、常に思を世道人心の上に潜め、密に冥々の功を積みて快しとするの風ありき。而して実践躬行は、翁の本領とする処にして、平素之を体現するのみならず、会々雑誌『道話』を借りて後進に薦告する処ありし如きは亦た人の知るところなり。(中略)翁は嘗て令名聞達を求むることなく、全く森村組に隠れ、森村組の事業に依りて本邦改革の宿志を遂げ、常に国益公利を以て念とせるが故に、其成功顯著となるに拘らず、更に名聞の揚れるもの無し只管天を敬し、神を信じて自ら国益を計り、世務を啓かんとする外、余念無かりき。<sup>(6)</sup>

道会は現在宗教法人として活動している。当時の拝天堂は惜しまれながら取り壊され、平成元年(一九八九)に新しい拝天堂が竣工したが、正面入口には、旧拝天堂の看板がいまも掲げられている。また介石は、道会が続く限り孫

兵衛の命日に墓参するようお願い残りしており、忌月の十二月に道会は毎年墓参を行っている。

## 五 大倉文二―徳行の紳士―



【図19】大倉文二  
沿革史資料No.10966

大倉洋紙店二代目社長となった大倉文二は、文久二年（一八六三）十二月九日、現在の新潟県阿賀野市水原で、佐藤清雄の次男として生れた。生家の佐藤家は代々水原八幡宮の神職を務めていた家であった。王子製紙の初代社長で、製紙王とよばれた藤原銀次郎は、文二を「立派な人格の紳士」「徳行の人」と評した。<sup>(62)</sup> 本章では文二の青年期について、従来の研究に補足を加えて紹介する。<sup>(63)</sup>

彼の人生の転機は明治十五年（一八八二）の出奔であった。理由は定かではないが、ある日突然、友人の安孫子久太郎と宇尾藤八とともに、東京を目指して郷里を離れたのである。東京に出た文二は、商法講習所（現一橋大学）<sup>(64)</sup> に入学し、ここで矢野次郎の薫陶を受けた。矢野は欧米式の商業教育を日本に導入した人物で、この時期に得た知識がのちの会社経営で生かされることとなる。

そしてこの頃、安孫子の影響でキリスト教に入信した。神道の家で生まれ育った文二であったが、安孫子の言動に魅かれたためであったという。その後、横浜で絹物売込商・荷見屋を営んでいた二宮安次の書生となる。二宮はのちに横浜福音会初代会長を務めるなど、明治初期のキリスト教メソジスト派の中心人物でもあった。<sup>(65)</sup> 二宮からの宗教的感化もあって、文二は洗礼を受けて、終生信仰を貫いた。



【図20】アメリカ滞在時の集合写真 明治20年代初期

画像提供：佐藤カツエ氏  
サンフランシスコで撮影された。後列右から安孫子久太郎、ひとりおいて文二、尾島弥太郎。前列右から高木種吉、大津栄三、本田輝雄。いずれも福音会の会員である。

はない。近年明らかになったのは、以下の三点である。

第一に、サンフランシスコ福音会との関係である。文二の渡米と福音会の関係は不明ではあるが、会長である美山をはじめ関係者が深く関わっていた。文二は友人の安孫子も入会していたこともあって例会に参加し、たびたび演説をするようになり、明治二十二年（一八八九）十月十二日に入会した。<sup>66</sup>翌二十三年には評議員となり、夜学校の教員も務めるなど、福音会の幹部として活動している。この時同じく幹部として活動していた一人が米山梅吉で、後述するように生涯交遊をもち続けた。<sup>67</sup>

明治十七年（一八八四）、サンフランシスコ福音会創立者の美山貫一<sup>みやまかんいち</sup>が帰国した。彼は関係者とともに東京福音会を結成し、福音会英語学校を創立した。同校には聖書と英語及び社会科学の講座が設けられ、ここで学んだ有為な青年たちはアメリカへ留学した。<sup>66</sup>文二が同校に通った記録は見当たらないが、横浜で美山と出会い、「品行も善く、信仰も厚く、將來望みあり」と認められて、アメリカ留学に誘われたという。<sup>67</sup>先に渡米していた安孫子から刺激を受けていたこともあり、二宮から旅費を借りて、文二は明治十八年にアメリカへ渡った。<sup>68</sup>

在米中の文二は、パシフィック大学で学ぶとともに、現地の商業事情をつぶさに見て回ったというが、その詳細は定かでない。

第二に、メリマンハリス夫妻との関係である。福音会英語学校を介して留学した日本人の多くは、ハリス夫妻の世話になっている。文二も同じように夫妻の助けを受けたという。妻のフローラとは、明治四十二年（一九〇九）に亡くなるまで交流しており、没後出版された伝記に文二の所感が掲載されている。以下、一部引用する。

余〔文二〕は桑港の貧書生であつたが、大抵の事柄では勉学を廢した事はなかつた。然るに故郷の家情は多少なりとも、在外の余が援助を与へねばならぬ次第になつて、余は断然学校に通ふ事をやめて、粉骨（粉骨）細身（細身）労働に従事しやうとまで決心した時などには、ハリス夫人は、余に対して非常の同情を表された。余は最も長く夫人の御世話を蒙つたから、御恩の程は深く感じて居る。<sup>(71)</sup>

第三に、森永製菓の創業者・森永（もりなが）太一郎（たいいちろう）との関係である。森永は明治二十一年（一八八八）年夏頃に諸事情で渡米し、サンフランシスコで九谷焼などの販売を試みている。この時に文二が通訳を勤めた。<sup>(72)</sup>福音会にて英語で演説していることから、かなり堪能であつたと思われる。なお、森永も美山に誘われて福音会の例会に参加していた。<sup>(73)</sup>

その後帰国した文二は、横浜山手で絹物を扱っていた外国商館のロセンソール・フリード商会に就職した。技術革新によつて福井の羽二重工業が急成長したことを受けて、同商会は明治二十五年（一八九二）に日本人名義で支店を設置し、文二がその責任者として赴任した。<sup>(74)</sup>経緯は定かではないが、文二は孫兵衛と知り合い、その人柄や働きぶりが評価されて、この年四月二十三日、娘美智子と結婚し婿養子となつた。

## 六 大倉文二の企業経営

### (二) ハイカラの大倉―大倉洋紙店の発展

文二は結婚後もロセンソール・フリード商会で働いていたが、明治三十一年（一八九八）九月二十二日、大倉洋紙店の事実上の経営者であった岩崎清吉が急逝すると、孫兵衛から懇請されて、同年十二月に支配人となった。<sup>(26)</sup>

はじめは全く異なる業種にとまどっていた文二であったが、すぐに商才を発揮して関東一円の販路を確保し、明治三十六年（一九〇三）六月十六日には大阪に支店を開業するなど、国内における事業を拡大した。

一方で貿易業に携わっていたこともあり、彼のまなざしは海外、特に中国大陸へも向けられた。明治三十九年（一九〇六）四月大阪支店内に、貿易部門として「大倉洋紙商行」を設立し、秋には天津に出張所を開設した。この時出



【図21】大倉洋紙店本店 大正時代初期

『清水組技術部設計建築作品集 事務所之巻』／画像提供：中央区立京橋図書館

外壁の上部には“大倉洋紙店”（左）と“BOKURA”（右）の文字が刻まれている。

張所に新たに入社したのが東亜同文書院を卒業した江原邦彦、のちに当研究所を創立する大倉邦彦である。邦彦の才覚もあって、大倉洋紙商行は洋紙だけではなく、さまざまな商品を取り扱う総合貿易会社へと発展した。<sup>(27)</sup>

明治四十四年（一九一）十一月、文二は孫兵衛から大倉洋紙店の財産、営業権の一切を譲り受け、名実ともに二代目店主となった。きっかけは

前述した、明治四十二年（一九〇九）八月の大倉書店本店ビルで起きた火災であろう。このビルにあった洋紙店の事務所も大きな被害を受け、これを機に両店は分離することになった。かくして翌四十三年六月、洋紙店の本店として木骨造の三階建てのビルが、西河岸橋のもとに竣工した。<sup>(78)</sup> 業界紙の『紙業雜誌』に、次のようにある。

日本橋頭市区改正跡に建築せられたる大倉洋紙店は、昨夏祝融の災に罹り、爾来日本橋区西河岸拾四号地に仮営業所を設け、同拾七番地に本舗新築中なりしが、該家屋は落成したるを以て、客月〔明治四十三年八月〕二十五日より之に移転し、益々洋紙業を営む由なり。<sup>(79)</sup>

この頃には江戸時代以来の商慣習が踏襲されていた大倉洋紙店の経営も、文二によって欧米的な方式へと改められ、店則を制定するなど、合理化が図られた。また店舗内に応接室が設けられるなど、店内の雰囲気も変わったことで、店員たちの立ち振る舞いも変化した。その結果、周囲からは「大倉洋紙店はひと味違う、近代的だ」「ハイカラの大倉」と評されるようになっていた。こうした点も鑑みて、孫兵衛は文二への経営権譲渡を決断したのである。

大正二年（一九一三）、文二は「大倉洋紙商行」の商号を「大文洋行」と改め、大正六年（一九一七）八月二日にはこれまで個人経営であった会社を株式会社とした。<sup>(80)</sup> 取締役社長には文二が、専務取締役には邦彦が就いた。ちなみに大文洋行の社名は「大倉文二」に、商標の「BO」は「Okura Buni」に由来して定められた。

ついで大正七年（一九一八）三月十四日、大倉洋紙店も株式会社化して、こちらも文二が取締役社長、邦彦が専務取締役となった。<sup>(81)</sup> 文二―邦彦を中心とする経営体制で、大倉洋紙店と大文洋行は更なる発展が目指されたのであった。

## （二）紙業界の重鎮として

大正三年（一九一四）から始まった第一次世界大戦によって、日本経済は空前の好景氣を迎えた。ただし紙業界で

は、戦場となったヨーロッパからの輸入量が減少し、逆にヨーロッパ製が品薄になった海外市場への輸出货量が増加した結果、国内の流通量が減少し、紙価は暴騰した。文二はこうした状況に対応すべく、同業者たちと連携してさまざまな手を打っていった。

第一に、同業者間のネットワークの形成である。<sup>(82)</sup> 明治四十五年（一九一二）三月、東京市内の主なる洋紙問屋が集まり、業界間の連絡を密にすべく壬子会が結成されていた。大倉洋紙店社長の文二も会員であった。第一次世界大戦を受けて連携の必要性が更に高まり、大正四年（一九一五）八月、協議機関として大正会が結成された。文二は同会にも参加し、中心的役割を果たした。同会の目的は、大手製紙会社に参加する日本製紙聯合会と協議して生産量を調整し価格の安定化を図ること、そして各問屋間で販売地域を分け、不要な競争が起きないようにすることであった。

第二に、自前の仕入れルートの確保である。そのため製紙会社との提携を強化し、新会社を立ち上げた。

提携会社の一つが、株式会社小倉製紙所である。<sup>(83)</sup> 前身は小室信夫こむろのぶが社長を務めた千寿製紙会社で、現在の福岡県小倉市を拠点としていた。経営難となって個人の実業家が譲り受けて小倉製紙所と改称し、その後蜂須賀侯爵家が経営権を得た。大倉洋紙店は明治三十年代半ばから取引を始め、優れた上質紙を作る技術をもっていたことから、羽衣印刷用紙や金鶏印刷用紙を特約品として発注していた。ある時、文二が経営陣に株式化して工場を拡張するよう助言したことで、明治四十五年（一九一二）七月三日に株式会社となった。この時、文二は取締役役に就任した。

もう一つの提携会社が、日本紙糸紡績株式会社（のち小田原製紙株式会社）である。同社は、強い繊維の和紙を細く切り、縞って作られた紙糸の製造加工を手掛けていた。第一次世界大戦のために生糸や綿糸などの価格が高騰したため、紙糸は代替品として需要が高まっていた。大正五年（一九一六）五月三十日に創業され、文二は翌六年六月七日に代表取締役となり、経営権を得た。<sup>(84)</sup>



【図22】創業時の南亜公司幹部 明治44年頃  
『株式会社南亜公司沿革』（国立国会図書館所蔵）  
前列中央に座っているのが森村市左衛門。後列右端が文二。

このほか、文二は立山製紙株式会社(85)の創業にもかかわっていた。稲藁を原料とする板紙は厚手で、軽便な紙箱などに使用されたため、当時需要が急速に高まっていた。そこで立山軽便鉄道（現富山地方鉄道）の社長であった金山かなやまに従じゅうかく革らは、板紙の製造・販売を目的とする事業の立ち上げを企画した。文二が大正六年（一九一七）十月三日に創業した日本板紙販売株式会社(86)の取締役に就いたこともあり、金山らは販路について相談し、かつ資本金の出資を依頼したのであった。かくして文二は五百株を引き受けて筆頭株主の一人となり、大正七年四月二十六日に創業されると、相談役に就任した。

第三に、製紙に必要な機材等の製造である。ヨーロッパからの輸入が途絶えがちになったため、国産化が喫緊の課題となっていた。一つは、株式会社杉浦鉄工場(87)である。抄紙機の製造販売を行った会社で、大正六年八月六日に株式会社化し、文二は社長に就任した。もう一つが、東京金網株式会社（現日本フィルコン株式会社）(88)である。製紙工場では、連続的に紙を抄くために抄紙機が使用される。その重要な部品である製紙用金網を製造する会社で、文二は王子製紙の藤原銀次郎らに呼び掛けて、大正五年（一九一六）四月十日に創業した。取締役社長に就任した文二は、製紙会社の支援を受けて生産環境を整え、品質の向上に努めた。

第一次世界大戦という変動期の中、文二は精力的に動いて紙業界を牽引し、周囲もまた彼に一目置くようになった。

### (三) 海外貿易への展望

大倉洋紙店内に貿易部門として「大倉洋紙商行」を設立したことは記述した通りであるが、文二はそれ以外にも貿易事業に携わっていた。

その一つが東南アジアにおけるゴム産業である。井上雅二いのうえまさじと法華津孝治ほけつこうじが、南方スマトラ及びマレー半島でゴム栽培を経営する事業を企画し、森村組関係者が資金の大部分を出資して、明治四十四年（一九一三）十月に株式会社南亜会社が創業された（図22）。文二は創立時から取締役を務め、大正二年（一九一三）には東南アジアへ事業視察に赴いている。これに関連して、ゴム製品の製造販売を行った東京護謨工業株式会社の取締役にも就いている<sup>90</sup>。なお南亜会社と東京護謨工業は、のちに昭和護謨株式会社（現昭和ホールディングス株式会社）に吸収合併された。

また文二は、大正五年八月から翌年三月にかけて、欧米諸国の視察に出かけた。自分の目で欧米諸国の現状を確かめ、大戦後の経営方針を見極めようと考えたのであろう。現地ではさまざまな知見を得たらしく、帰国後に力を入れようとしていたのが染料の輸入であった。スイスで染料製造業が盛んになりつつある様子を見て、スイスの業者との取引を考えた。そこで外務省に輸入上の取締規定を問い合せ、スイスの状況について改めて調査を依頼していた<sup>91</sup>。

## 七 大倉文二の社会貢献

### (一) 実業家として

文二の大正五年（一九一六）の欧米視察について、次のように書かれている。

大正五、六年の交、約一ヶ年間英米両国を漫遊し戦時中両国に於ける精神界及び物質界の実相を具に視察し、大

いに得る処あり。歸来之を關係事業に応用せるもの尠らず。殊に英米人が大戦中強烈なる宗教的信念を持し、且つ社会的事業に専ら尽瘁せるを見、大に動く処あり。他日我邦に於ても自ら進んで其衝に当らんことを発心せるが如し。<sup>(92)</sup>

しかし、文二は早くから社会貢献に関心を寄せていた。その取り組みの一つが日新青年倶楽部で、明治三十九年(一九〇六)十二月に立ち上げ、松村介石らを講師として招いて商業道德講演会などを開催した。<sup>(93)</sup> 右倶楽部の創立發起人の住所は「東京日本橋区通壹町目大倉洋紙店内」となっていることから、文二が創立を提唱したと推測される。長文にわたるが、未紹介なので趣意書を左に掲げたい。<sup>(94)</sup>

今や日露の戦争も全く其局を結び、平和の競争は大に其歩武を進めんとす。皇軍の勝利は全世界を聳動せり。而して今後実業上の戦争は漸く世界的舞台に其輪贏を競はんとするに至る。実業の振不振は国家の運命に至大の關係を有し、而して之れが隆替は主として当業者の用意如何に因す。実業に従事する人士の責任は重大なりと云ふ可し。而も此責任たるや独り營業主たるもの、みに止まらず、之れが実務に当る者は皆均しく負担せざるべからず。茲に於て乎、当局青年者の奮起を促し、其氣質を矯正し店風を改良し、進んで実業界の弊習を洗除するの事業は今日に於て最も急務なりとす。

今を去る六十余年前、英国倫敦市の或る呉服店に奉公せる一青年ジョージ、ウイリヤム氏は拾八歳にして、其店內青年間に於ける種々の誘惑に付て熱心之れが防護の方法を考究し、店員間に精神的教養の必要を感じ、敬神の念を有する二、三同輩と謀り其商店内に青年会なるものを組織し、鋭意矯風の事に努めたりしに、其効空しからず、輒ち其店内の風気を善化したりしのみならず、終に倫敦市に於ける実業社会の一大革新を来し、今日に於ては世界各国に基督教青年会の勢力偉大なるを見るに至る。之れ全く此一小商店員の計画に基く事業なりとす。現

時我邦実業上の道徳缺乏に關し内外識者の非難を聞くこと少からず。之れ大に反省すべきことにして、當さに実業青年者の奮起を要する秋に際会せり。

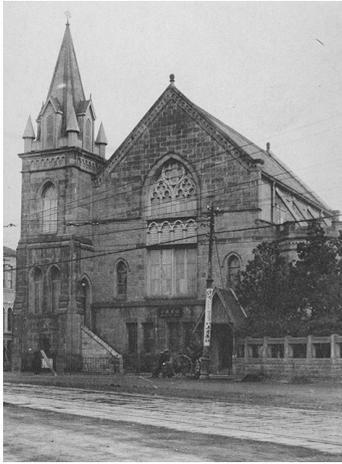
之を以て今般同志相謀り、前記倫敦市に於ける基督教青年会の創立に倣ひ、精神的修養を主とし、併て清潔なる社交娯樂及び身体の發育に資すべき設備を爲し、実業青年の俱樂部を設立せんとす。幸に有志諸彦の御賛同を請ふもの也。

ここで取り上げられているイギリスの事例は、ジョージ・ウィリアムズが一八四四年に立ち上げたキリスト教青年会 (Young Men's Christian Association、通称 Y M C A) である。日本では明治十三年 (一八八〇) 東京に設立されて以降、全国の各都市や学校内で結成され、明治三十六年 (一九〇三) 七月に合併して日本基督教青年会同盟 (現公益財団法人日本 Y M C A 同盟) が誕生した。文二は同会の幹事を長く勤めており、<sup>(95)</sup> 日新青年俱樂部もその活動の一環であろう。この後継団体と推定される「日本橋青年俱樂部」<sup>(96)</sup> 「実業青年俱樂部」<sup>(97)</sup> の事務所は、いずれも東京基督教青年会の本部会館であった東京青年会館内に置かれている。

文二は洋紙店の店員らに、「真の成功とは何ぞ。吾等が日々孜々として業務に勉勵するは何の爲ぞ。(中略) 曰く善良なる一個の市民たらんが爲なりと。」「我等の成功する否とは、時々刻々の間に横はる事物に対する我等の態度如何に存し、而して其の態度を定むるものは実に我等自身の意思に外ならざるなり」<sup>(98)</sup> と説き、店内で毎月修養会を開いていた。実業界に身を置いている文二にとって、一店員から全世界へと感化を及ぼしたウィリアムズの姿は非常に感銘深く、模範すべき人物として位置づけられていたのである。

## (二) キリスト教徒として

文二が所属した教会は日本メソジスト銀座教会で、明治四十年（一九〇七）七月、メソジスト築地教会と中央美以教会が合同し誕生した。「小事にも大事にも忠にして、如何なる場合にも力として仰ぐに足る頼母敷き人」と評されたように、文二は銀座教会の発展に貢献した。誕生から三年後に教会堂の改築が決まり、明治四十四年（一九一一）二月二十三日に落成した。この時、文二は建設委員・建築費募集員に就任している。その後も委托人（大正五年、六年）や幹事（明治四十四年、大正四年、五年、六年、七年）を歴任し、大正七年（一九一八）に銀座教会が財団法人となった際には理事に就任した。この他にも、実業家の立場から関係各所で講演を行ったり、日本橋教会が創立されると代表者の一人となり、店内で毎月一回聖書講演会を開催した。また銀座教会は、明治二十三年（一八九〇）三月に発会した東京禁酒会が置かれるなど、日本における禁酒運動の拠点であった。文二もまた禁酒運動に熱心で、大倉

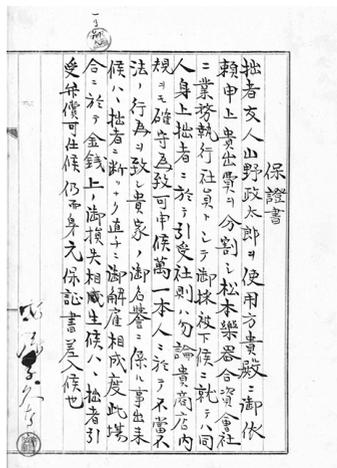


【図23】銀座教会教会堂

『建築写真類聚 特殊建築 卷一』／画像提供：中央区立京橋図書館  
大正12年（1923）関東大震災で焼失した。

洋紙店では三等以下の店員及び独身者は飲酒が厳禁され、社員募集では「禁酒主義者」を優先して採用することになっていった。

この銀座教会には、さまざまな職種の人びとが集っていた。その一人が日本初のピアノ調律師、ピアノ及びオルガン製造者であった松本新吉で、文二は彼の事業を支援している。松本はアメリカでピアノ製造の技術を学び、明治三十七年（一九〇四）にピアノとオルガンの製造販売を手掛ける松本楽器合資会社を設立したが、二年後の明治三十九



【図24】安孫子久太郎保証書

大倉精神文化研究所蔵資料 資75

年二月、築地にあつた製造工場が全焼してしまつた。この時から文二は資金援助を始め、同年九月には月島に新しい製造工場が完成した。そして明治四十二年（一九〇九）二月十六日、松本楽器合資会社の登記が変更され、出資者が松本と和田劍之助の二人から、山野政太郎、芝栄吉、山本静雄へ変わり、事業目的に「木金工業」が追加された。

従来の研究では、山野、芝、山本の三名は大倉書店から出向してきたとされているが、すくなくとも山野は大倉洋紙店の社員であつた。その根拠の一つは、かつて文二とともに出奔した

安孫子久太郎による身元保証書である。新出資料なので、これも全文を掲げたい。

拙者友人山野政太郎を使用方貴殿に御依頼申上、貴出費を分割し松本楽器合資会社に業務執行社員として御採用被下候に就ては同人身上拙者に於て引受、社則は勿論貴商店内規をも確守為致可申候。万一人人に於て不当不法の行為を致し貴家の御名誉に係る事出来候は、拙者に断りなく直ちに御解雇相成度。此場合に於て金銭上の御損失相生候は、拙者引受弁償可仕候。仍而身元保証書差入候也。

安孫子久太郎

文二より先に渡米した安孫子は、サンフランシスコで新聞『日米』を創刊するなど、日本人移民の指導的立場にあつた。山野は二十二歳の時に渡米しており、この時に安孫子と知り合つたのであろう。その後、安孫子は明治三十五年（一九〇二）に日米勸業社を立ち上げ、移民者たちの定住を促進させるべく、農業用土地の購入を企画した。そして明治四十一年十一月、その資金を調達するため、安孫子は一時帰国した。十一月十四日に芝公園紅葉館で安孫子

の歓迎会が開催された際には、文二は発起人の一人となっている<sup>(10)</sup>。この日本滞在中に安孫子は「友人山野政太郎」のことを文二から聞き、身元保証人を引き受けたのであろう。文中に「貴商店内規をも確守」とあることから、山野が大倉洋紙店の社員であったことは間違いない。

かくして山野は松本合資会社の代表社員となり経営を担い、そして大正四年（一九一五）三月に一切の権利義務を継承した。松本楽器合資会社は山野楽器店と店名が変わり、現在も東京都中央区銀座に本店を構えている。

### (三) その他の社会貢献活動

文二は二十歳で故郷の水原を離れ、その後帰郷したことがあるかは定かではない。しかし事業家として成功を収めると、積極的に経済的支援を行っていた。明治四十五年（一九一二）には、小学校二校へ計千円を基本財産として寄附しており、新たに北蒲原郡水原町役場用紙による受領証<sup>(11)</sup>も見つかった。

もう一つ見逃せないのは、青山学院大学との関わりであろう<sup>(12)</sup>。学院では大正四年（一九一五）末に第一次拡張計画が決定し、基金への募集が始まった。その趣旨の校友代表者の一人に、文二の名前がある<sup>(13)</sup>。同学院はメソジスト派の宣教師によって創設された女子小学校、耕教学舎、美会神学校の三つの学校を源流としているが、文二がいずれかに在籍していた記録は確認できず、校友と位置づけられた理由は定かではない。ただ、この基金管理委員長が米山梅吉であったことが、文二が青山学院と関わりをもった要因であろう。米山は銀座の福音会英語学校を経て明治十九年（一八八六）に渡米し、前述したように、文二とともにサンフランシスコ福音会で活動していた。文二は大正七年（一九一八）四月三十日の晩餐会の席上で、五千円の寄附を表明した<sup>(14)</sup>。個人の寄附としては、他と比較してもかなりの高額である。この他、サンフランシスコで世話になったメリマン・ハリスの邸宅が学院内に建築された際には、米

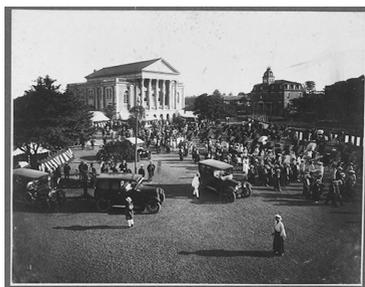
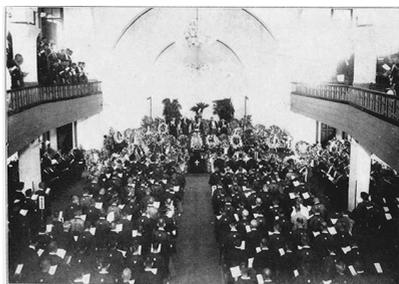
山らとともに建築費の一部を寄附した。<sup>(11)</sup>

そして大正七年三月十八日の理事会で学院職制が改正され、新たに評議員及び評議員の設置が決定した。これにより評議員に囑託された文二は、七月八日の教役者会及び教会聯合親睦会に出席している。<sup>(12)</sup> 何事もなければ、学院の発展にその後も貢献したであろうが、彼に残された時間はもはやなかった。

#### (四) 突然の死去

実業家としてもキリスト教徒としても円熟期を迎えていた文二は、多忙な日々を送っていた。大正七年七月十五日に本所基督同胞教会で演説し、十六日に大倉洋紙店の第一回定時株主総会を開き、十七日には小田原の別荘へ移動して、十九日の鎮礎式―日本紙糸紡績株式会社の新工場―に関して会社幹部らと事前打ち合わせを行い、夜は食事を共にして床に就いた。<sup>(13)</sup>ところが翌朝の散歩後に胃痛を訴え、すぐに小田原医院に搬送された。医師の診断により開腹手術が行われたが、十九日午後二時に危篤状態となった。ひどい苦痛の中、文二は家族と洋紙店の幹部に後事を頼み、銀座教会の鶴飼<sup>うがひし</sup>猛<sup>まう</sup>牧師による祈りが捧げられて、午後六時頃に死去した。臨終には、森村開作<sup>ひらきく</sup>と松村介石も立ち会っていた。享年五十七、死因は穿孔性腹膜炎であった。あまりにも突然の出来事であった。

『朝日新聞』同年七月二十二日付朝刊に、文二の訃報広告が三つ掲載されている。二つは経営していた企業―大倉洋紙店、大文洋行、日本紙糸紡績、東京金剛、杉浦鉄工所―の名義で、残りの一つは親戚及び友人の名義となっている。親戚総代には、養子の邦彦を筆頭に、大倉和親（義兄、以下（ ）内は文二との続柄）、佐藤絹（実姉）、大倉保五郎（義叔父）、田中武兵衛、百々木三郎（以上、義弟）、江原貞晴（邦彦の実父）、森村開作（表弟）の名前がある。そして友人総代には、企業家の和田豊治<sup>わだよしじ</sup>、東京紙商同業組長・岡田来吉のほか、キリスト教メソジスト派として行動



【図25】 青山学院での葬儀（右上）と大講堂場前（左上・右下・左下）の光景

（右上）大倉文二遺著『残月』（国立国会図書館所蔵）

（右上・右下・左下）画像提供：佐藤カツエ氏

を共に行動してきた米山梅吉と和田劍之助が  
名を連ねた。

文二の葬儀は青山学院の大講堂（弘道館）  
で、七月二十四日午後四時から執り行われた。  
講堂正面には数十個の花環が飾られ、会葬者  
は約千五百人で、堂内には立錫の余地がな  
かった。美山貫一やハリスなどの姿もあり、  
また海運王とよばれた山下亀三郎は棺にす  
り号泣したという。彼はかつて大倉洋紙店に  
勤め、文二を兄事していた。

そして文二が所属していた銀座教会では、  
日本橋教会との共催で、九月二十六日午後七  
時から追悼記念会が催され、約二百人の来会  
者が文二へ祈りを捧げた。会場には森村市左  
衛門も駆け付けていた。病気であったため来  
賓紹介だけに留まる予定であったが、市左衛  
門は押しして講壇に上り「大倉氏を模範とすべ  
き」と一言だけ告げた。年老いた市左衛門に

とって、期待を寄せていた文二の急死は痛恨の極みであったのであろう。

## 八 大倉邦彦―実践躬行の人―

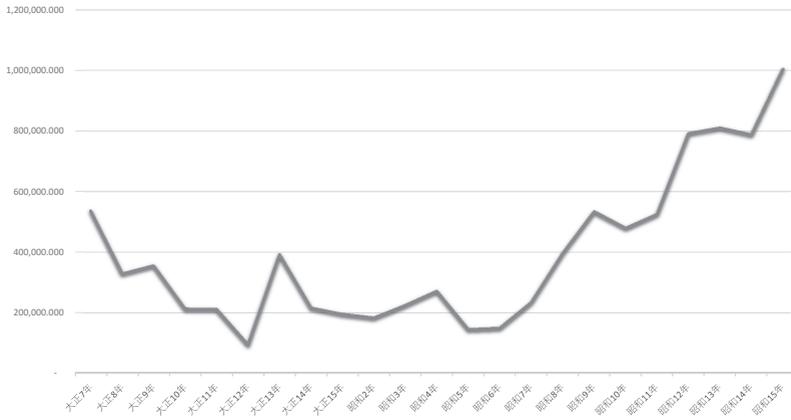
大倉邦彦（以下、邦彦）は、明治十五年（一八八二）四月九日、佐賀県神崎市姉川地区の素封家江原家に、次男として生まれた。<sup>⑧</sup>横武尋常小学校（現神崎市立西郷小学校）、勸興小学校全科（現佐賀市立成章中学校）、佐賀県佐賀中学校（現佐賀県立佐賀西高等学校）を経て、上海の東亜同文書院商務科（第三期）に進学し、明治三十九年（一九〇六）の卒業後、文二が新たに立ち上げた大倉洋紙商行に入社した。邦彦は天津出張所所長として会社発展に大きく寄与し、その働きぶりが文二に認められ、明治四十五年（一九一三）四月九日に文二の養子となり、翌年には文二の娘富美と結婚した。

邦彦の座右の銘は「実践躬行」である。この言葉の通り、彼は自らの信条、理念を基に企業経営を展開した。

## 九 大倉邦彦の企業経営

### （一）「信用と堅実」の経営―事業の継承と拡大

大正二年に東京へ呼び寄せられた邦彦は、文二の下で働きながら経営者としての心構えなどを学び、いずれ文二の後を継ぐ予定であった。ところが文二が急逝したため、大正七年（一九一八）七月二十六日、三十七歳で大倉洋紙店の三代目社長となった。<sup>⑨</sup>



【図26】大倉洋紙店の純利益の推移

(大正7年度～昭和15年度)

大倉精神文化研究所作成 (参考:『大倉洋紙店事業報告書』第1回～第46回)

就任直後は大戦景気によって業績は右肩上がりであったが、第一次世界大戦が終結すると、日本経済は慢性的な不況に陥り、洋紙店の業績も年々落ち込んだ。ようやく回復の兆しが見え始めた大正十二年(一九二三)の九月一日、関東大震災で発生した火災によって日本橋一帯は焼失し、西河岸橋たもとにあった大倉洋紙店の本店ビルと倉庫も全焼した。震災から三日後には営業を再開し、京橋区南紺屋町の実業ビルディング内に仮営業所を設けたが、会社の資本金を減少せざるを得なかった。

そうした中、邦彦は昭和三年(一九二八)六月、新しい本店ビルの工事に着手した。構造は鉄骨鉄筋コンクリート造の七階建(地階共)で、設計はのちに大倉精神文化研究所本館(現大倉山記念館)も担当する長野宇平治に依頼し、設計監督技師として荒木孝平を招聘し、合名会社竹中工務店(現在は株式会社)が工事を請け負った。この時、邦彦は「どんな大地震がきても倒れない建築を」と注文したと伝えられている。昭和四年八月に竣工したこのビルは西河岸のシンボルの存在であったが、本店が昭和四十八年(一九七三)に千代田区神田錦町に移転したため、まもなく解体された。その際、鉄筋があまりにも頑丈であったため、洋紙

店は解体業者に追加料金を二回払わざるを得なくなつたという。

極めて厳しい経営状況の中でも、邦彦は「当社の方針とする信用と堅実」<sup>(14)</sup>「地味なる努力と顧客に対する真実」<sup>(15)</sup>といった経営理念を堅持し、社員一同にも徹底するよう指示した。少しずつではあるが業績は回復し、昭和六年度を機に大倉洋紙店は飛躍的に業績を伸ばした。

邦彦は大倉洋紙店だけではなく、文二が経営していた会社経営をいくつか引き継いでいる。また新たに特種製紙や愛知洋紙店などの社長にも就任した。実業家として多忙な日々を送っていた邦彦は、昭和十五年（一九四〇）、大倉洋紙店をはじめすべての社長職を退き、会社経営を後進に譲つた。五十八歳となり、余生をすべて、後述する社会事業に費やそうと考えたからである。

## （二）「人こそ商売の元」―実業界への復帰

昭和二十年（一九四五）十二月、邦彦は戦犯容疑を受けて巣鴨プリズンに拘留された。その後嫌疑は晴れて昭和二十二年八月に釈放され、同年十二月に特種製紙株式会社代表取締役社長に就任し、実業界へ復帰した。

当時、邦彦が主宰していた大倉精神文化研究所は存続の危機に瀕していた<sup>(16)</sup>。終戦直後で経済が混乱し、株の配当も預金利子もなくなつたため、運営資金が枯渇したのである。そこで邦彦は、妻と研究員八名及びその妻、計十八名で出資者となつて、新しい会社を創業した<sup>(17)</sup>。研究所員五人が主に経営に当つたので、「五人が心を合わせて輪を組めばなんでもやり抜ける」との趣旨から、社名を「五輪堂」と定めた。はじめは特種製紙の支援を受けて封筒やノート類の販売を扱っていたが、研究所附属図書館での経験から図書カードの製造を企画し、特種製紙の協力を受けて商品開発を行った。五輪堂の図書カードは利便性が高く評価され、中央官庁や国立国会図書館など、国内の主な図書館で使

用された。その後も業績を着実に上げ、株式会社に改組した後、昭和三十九年（一九六四）十一月二十日、五輪堂は大倉洋紙店の特殊紙部として発展の合併を果すこととなった。

一方、邦彦は昭和二十九年（一九五四）に実業家として大きな転機を迎えた。大倉洋紙店が、融資先の倒産によって約二億円の負債を抱え込み、債権者や金融機関が邦彦に社長へ就くよう懇願してきたのである。彼らは邦彦の経営手腕だけではなく、業界に絶対的な信用を得ていた邦彦が復帰することで、事態の収拾に繋がるのではないかと期待したからであった。当初は固辞していたが、ついに邦彦は七十二歳で再び大倉洋紙店の社長となった。



【図27】 日本能率学校卒業 昭和25年頃

沿革史資料No.6855-41

理化の精神を、会社経営の中に積極的に取り込んでいる。これは、巢鴨ブリ

ズンから釈放されてからまもなく、産業能率短期大学（現産業能率大学）に入学して経営学を学んでいたからである。また金融機関などからリストラを促されたが、邦彦は「人こそ商売の元」と言い、人員整理は一切行わなかったという<sup>(18)</sup>。むしろ戦前期と同様、邦彦は社員教育に力を入れ、毎年春には新入社員研修会が大倉精神文化研究所で行われた。かくして、少なくとも十年は必要と予想されていたが、邦彦の経営手腕と社員の奮闘によって、社長就任から三年後の昭和三十二年中にすべての債務を完済することに成功した。

邦彦は昭和三十六年（一九六一）に社長を退き会長となり、亡くなる直前まで会社経営に関わった。大倉洋紙店はその後、昭和四十六年（一九七二）の株式会社博進社との合併、平成十二年（二〇〇〇）の三幸株式会社との合

併、そして平成十七年（二〇〇五）の株式会社岡本との合併を経て、現在は新生紙パルプ商事株式会社として、紙、パルプ、化成品、化学薬品の販売及び加工並びに紙加工品の販売などを行っている。

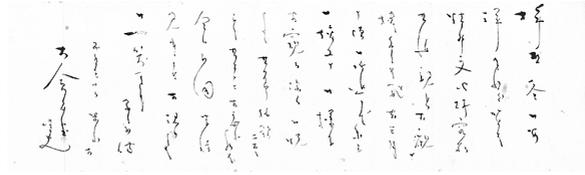
### （三）関係団体との交流

大倉洋紙店社長であった邦彦は、東京紙商同業組合の副組長を務めるなど、業界の関係団体でも中心的な役割を果たし、また孫兵衛、文二からの人脈を介して経済界の重鎮らとも交流し、さまざまな関係団体に参加し、役員を務めるなどしている。ここでは、二つの事例を紹介したい。

一つは、東京ロータリー倶楽部（東京RC）である。日本ではじめて設立され、大正十年（一九二一）四月に国際ロータリーに承認されたロータリークラブである。初代会長の米山梅吉と初代幹事の福島喜三次を中心、「奉仕の精神」の下、さまざまな社会貢献運動を展開した。邦彦は大正十二年（一九二三）九月に入会し、昭和七年度には副会長を務めた。当研究所には、渋沢栄一（渋沢栄一）や当研究所本館（現横浜市大倉山記念館）の設計を担当した長野宇平治らとともに写っている集合写真（現）や、昭和四年（一九二九）四月二十七日のロータリー第一回地区大会の集合写真（現）などが現存している。

当時、会員は一業種一人が原則で、邦彦は洋紙卸商から選ばれて会員となっている（現）。そして入会には推薦人が必要であったが、おそらく米山が務めたと思われる。前述したように、米山は文二と親交があり、死亡広告に友人総代の一人として名を連ねた。その後も邦彦と交流していたようで、本研究所には米山からの書翰が五通現存している（現）。そのうち一通は、米山自筆の和歌が認められた短冊が同封されている（図28）。以下、全文を掲げよう。

拝啓 益御安祥奉慶賀候。精神文化研究所其近況を拝観の機会候哉と、去三月中頃御附近まで参上、御竣工の御



【図28】大倉邦彦宛米山梅吉書翰

昭和9年（1934）5月30日  
沿革史資料No.38824

様子相窺い、弥々御悦申上候。其節拙歌二首有之、其まゝに相忘れ居候。  
今日不図草稿見出候に付相認め申候。御一笑可被下候。早々不備

五月三十日

米山拜

大倉老台

侍史

（別紙短冊）

大倉精神文化研究所を過ぎりて

人のこゝろ世のみち守ると城なしておかの上高く立つこゝにしれ 梅吉

精神文化研究所を過ぎりて

大倉山菜の花の黄金しろかねのもゝ園こえて世にし見るかも 梅吉

米山は歌人の佐佐木信綱<sup>註</sup>に師事し、歌集『東また東』『四十雀』などを残している。こうした短冊からも、二人の親密さがうかがい知れよう。

もう一つが日本工業倶楽部である。<sup>註</sup>大正六年（一九一七）、「工業家の連絡を鞏固にし、斯業の発展を図ること」を目的として設立された、当時の工業関係の個人及び法人を会員とする公益法人（現在は一般社団法人）である。経済問題、労働問題などに関して調査活動を行い、時には政府へ建議するなど、今日まで経済団体として重要な役割を果たしてきた。邦彦は食堂委員（昭和四年～昭和六年）や集会委員（昭和十四年～昭和十六年）を経て、評議員（昭和





【図29】 寿杖贈呈式 昭和44年（1969）

沿革史資料No.6878

日本工業倶楽部では、米寿を迎えた会員に記念品として寿杖が贈呈されている。邦彦は昭和44年に受贈した。

十六年（昭和二十三年、昭和三十九年）に選ばれた。創立時には文二も評議員に選ばれている。なお同倶楽部の創立発展に大きく寄与したのは、「第二の渋沢」と称され、文二の死亡広告にある友人総代の一人、和田豊治である。

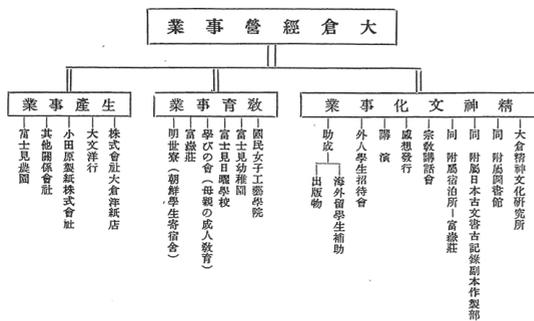
邦彦にとって日本工業倶楽部は、実業面でも思想面でも深く関わりを持った団体であった。例えば、日本工業倶楽部会館は当研究所の編纂会議や役員会などの会場として度々利用され、また倶楽部の事務局や会員が当研究所を参観に訪れている。また戦後の国内情勢を憂えた邦彦は、会員である経済界の重鎮に呼び掛け、昭和四十一年（一九六六）十一月、倶楽部内に九日会を立ち上げた。<sup>18)</sup>

## 九 大倉邦彦の社会貢献

### （一） 大倉経営事業

邦彦の社会事業については、これまで本論集等で詳述されてきており、本稿ではその概要を整理するにとどめる。

邦彦は昭和七年（一九三二）四月九日に大倉精神文化研究所を設立し、それまで自ら手掛けてきた事業を「大倉経営事業」と位置づけ、各事業を「生産事業」「教育事業」「精神文化事業」の三つに分類して整理した（【図30】）。



【図30】大倉經營滋養

沿革史資料No.209「私の使命事業」(昭和7年)より転載

このうち、生産事業を「使命事業の炊事場」と表現している。大倉經營事業全体の経費はすべて、邦彦が經營する大倉洋紙店、大文洋行、小田原製紙株式会社等の会社から得られる個人収入によってまかなわれていた。

## (二) こころを育てる―大倉邦彦の教育事業

教育事業は研究所が創立される前から着手され、昭和九年度には研究所事業の教育実践として位置づけられた。邦彦は、物質的な豊かさを追求するのみでは精神的な豊かさは手に入らず、人は幸福にはなれないという信念を持っていた。

最初に手掛けたのは幼児教育で、大正十三年(一九二四)東京府荏原郡目黒町(現目黒区中目黒)に富士見幼稚園を設立した<sup>(16)</sup>。当時、幼児教育はさほど重視されていなかったが、邦彦は、幼少期の学びや体験が「潜在意識となつて人間の基礎をなす」と考えていたからで、同園の標語は「強く、賢く、親切に」とされた。その後、卒園生を対象とした富士見日曜学校、幼稚園の保護者会を發展させた富士見学びの会なども開いた。昭和十九年(二九四四)に戦局の悪化を理由に閉園させられるまでに、毎年百名程の卒園生を世に送り出している。

次に始めたのは女性教育で、昭和三年(一九二八)一月、郷里の佐賀県神埼郡(現神崎市)に農村工芸学院を開校した<sup>(17)</sup>。対象は、十八歳(満十六歳)以上で、高等女学校・補習学校卒業程度の学力を有する女子であった。

修学期間は一年で、「宗教的信念に基づく人生観」を育むための静座や瞑想祈願、そして「生産者として独立の生計を立て得る迄徹底した職業教育」として技芸（刺繍・編物）に多くの時間が割り当てられていた。邦彦は、女性が精神的かつ経済的に自立することが必要で、ひいては郷里の農村を振興することにつながるかと考えていたからである。

こうした邦彦の教育事業は当時の新聞・雑誌で取り上げられ注目されるようになった。そうした折、東洋大学の関係者から学長就任の依頼があった。東洋大学は当時学生数の減少などによって慢性的な財政難に苦しんでいた。教育に理解があり、実業家でもあった邦彦に白羽の矢が立ったのである。大学関係者から話を聞いた邦彦は、創立者・井上円了の建学精神が自分の理想と合致することを知り、就任依頼を受諾した。

かくして昭和十二年（一九三七）から二期六年、邦彦は学長を務めた<sup>(10)</sup>。この間、邦彦は無給で、また研究所の理事や研究員を教職員に任命し、その給与はすべて私財でまかなった。財政の健全化をはかり、教育・研究面で改革を実施した結果、入学生の数はずっと増加し、大学経営は安定に向かった。また拓殖科の新設、倫理教育科の経済教育科への改組、史学科の増設は、同大学が戦後に科系単科大学から総合大学へと発展する礎となった。

### （三）「心」と「知性」——大倉邦彦の精神文化事業

昭和七年（一九三二）四月に設立された大倉精神文化研究所を柱とする精神文化事業は、大倉経営事業の中核であった。邦彦は、混迷する時代を救済するためには、人びとの中に「宗教的信念に立脚せる正しき人生観」を確立させること、そして「人類文化の普遍的意義」と日本の「精神文化の本質的価値」を精究して、「正しき信念に基づく国家観」を持たせることが喫緊の課題と考えた。当初は精神図書館の設立という構想であったが、前者の「心」と後者の「知性」を身に付けた人材を育成し、社会にそれらを発信していくことを目的として、研究所を設立する方針へ

と展開したのであった。そのため、心を育む実践的躬行（教育実践）―大倉山修養会・講習会など―と、「知性」を身につける精神文化の精通（研究）を両輪にして、研究所の事業は実施された。

### ―おわりに―大倉家三代にみる理念―

以上、大倉孫兵衛・文二・邦彦の大倉家三代による企業経営と社会事業の実情を見てきたが、三人とも各種企業のリーダーとして経営実績を挙げ、その利益を通じてさまざまな社会貢献を展開していた。そしてその行動の背景には、それぞれが持っていた人生哲学があった。

孫兵衛は晩年成瀬仁蔵や松村介石らと深く交わったが、彼らの精神基盤であるキリスト教に入信してはいない。孫兵衛の人生哲学は、彼らとの交流を通じて実体験が整理され、彼らの宗教哲学によって概括されていた。平井誠二は孫兵衛の職業観、倫理観を、①「為せば成る」という強い信念、②仕事を天から授かった「天職」と捉え弛まず努力すること、③商売には「正直と誠実」が必要不可欠であること、④事業を通じて「人を益し国を益すること」を目的とすること、そして⑤国などを頼らずに「独立自営」を貫くこと、といった五つの観点で整理している。

一方、文二の人生哲学は、若き日に入信したキリスト教メソジスト派の精神によって形成された。例えば、文二は「愛隣利他」、すなわち聖書にある「己れの如く汝の隣を愛す可し」「己れの欲する所は之を他に施す可し」（マタイによる福音書）を、大倉洋紙店の店則で「根本の主義方針」に位置づけている。

邦彦は研究所の理念の一つに「東西文化の融合」を掲げていたが、個人としては仏教、曹洞宗の原田祖岳に参禅したように、とりわけ禅に傾倒した。そのため、彼の講話や著述には禅に関する用語や逸話が頻出し、禅語「随处作

主」の書がいくつか残っている。この他に座右の銘といふべきものとして「宇宙心」がある。邦彦の造語で、宇宙全体にゆき渡つて全ての現象を司つている「根源」「法則」を意味する。いずれにせよ、邦彦の人生哲学には東洋的な学問・思想の影響が見て取れる。

このように血縁関係はなく、異なる環境で成長した三人の間に、人生哲学の違いが生ずるのは当然であろう。しかし、共通するものもみとれる。

一つは、「自身の人格を高めることが、結果的に成功へとつながっていく」という人生観である。

(孫兵衛) 仮令ひ氣質は百人百種なりとも、事を為すに当りて、其の成敗は唯だ心得が至誠であるか否かによりて決せられるのであります。心得が至誠なれば、乃ちかけひなたのなき働きともなり、又た最善を尽すべく細心の注意を払ふ事ともなりて、遂に予期せざる大効果を収めざるを得ざるの好境に到達するのである。<sup>(14)</sup>

(文二) 自己の置かれたる地位境遇に應じて、全力を傾倒して日々眼前に起り来る大小の事務に精勵し、飽迄も自己の義務責任を忠実に履行し遂げ、之が為には人間の最も恐るべき誘惑たる耳目口腹の欲望を犠牲にして、一歩一歩真摯健全なる生活を営んで行く、これが成功者の踏むべき唯一の途である。<sup>(15)</sup>

(邦彦) 利益問題を中心としたる交際は永続せざる様に、商売も儲の為とのみ考ふれば繁榮せず。天の命人の道と考へ、真の親切心より出たる営業は、自他共に喜びに満ち、店内を浄化し、得意先は親友の間柄となる。されば人格と労力に対する正当の報酬として利益を生ず。<sup>(16)</sup>

「至誠」「真摯」「親切心」と異なる表現ではあるけれども、その意味するところは一致している。大倉洋紙店では、社員教育に力を入れていた。「誠実な仕事」「熱心な研究」に努め、「品行方正」「修養」を心がけることで、周囲の「信用」が得られる。会社にそうした人びとが多く集まれば、その結果として「利益」が生まれる。結局、物事が成

功するかどうかは、一人一人の「人格」如何によると考えていたからである。こうした人生観から大倉家三代の経営理念は形成されていた。

もう一つが、「利他のこころ」「国会社会への還元」という奉仕の精神である。

(孫兵衛) 何うぞ工商業家は、己一個の利益のみを心に置かず、我国や、隣人を益すと云ふ事に想ひ到り、終には世界に向つて、広く人類の爲めに万事やつて居ると云ふ高い考の立派な人になつてほしい。<sup>(10)</sup>

(文二) 商業の目的は何であるかと申しましたら「貴重なる天職にして吾人日用物品の有無交換に関する社会に尤も必要な職業なり」といへませう。言を換へて云へば「人の為に計り人の為に働く」ともいへませう。(中略) 只正直にして己一人の利をのみ計らずといふ一事にあらうと思はれます。<sup>(11)</sup>

(邦彦) 商売の目的は何であらうか。私利を営む手段であつてはなるまい。世の為に専念すれば自ら利益の副産物が取められる。その副産物をば、己の欲望満足にのみ費してはなるまい。国家社会を繁栄させる肥料としなければならぬ。<sup>(12)</sup>

彼らにとつて商売は「世の為に」行う「貴重なる天職」であつて、生じた利益は天からの「副産物」であつた。それ故に隣人の裨益となり国家社会を繁栄させるために、利益は使用しなければならぬと考へていた。今回の展示タイトルの「世の為に田を耕す」は、邦彦が刊行した冊子『感想』の題目の一つで、その事をまさに表現している。<sup>(13)</sup>

前記した孫兵衛の「何うぞ」は「孫婿に送りし文」の一節で、すなわち邦彦に宛てた言葉である。これに応ずるように邦彦は、次のように語っている。

芸術家は創作を目的として喜びが与へられ、慈善家は人の苦を救ふ事を目的として満足が得られ、商人は社会貢献を目的として利益が贏ち得られる。(中略) 現代は目的と手段とを取違へて自他を苦しめつゝある。<sup>(14)</sup>

企業のフィランソロピー（慈善活動、社会貢献活動）やメセナ（文化支援活動）などの必要性が叫ばれている今日、大倉家三代の事績は様々な示唆を与えてくれる。しかしその実情についてはまだ不明瞭な点も多く、更なる資料調査に努めていきたい。

注

- (1) 「神ながらの商売道」（大倉邦彦「感想（其十）」） 私家出版、昭和九年二月。
- (2) 具体的な成果は、『大倉山論集』六三（平成二十九年三月）から本論集までの特集の各論文を参照されたい。
- (3) 大倉孫兵衛「老人の考ふべき事」（『道話』十二、明治四十五年四月）八頁。
- (4) 大倉孫兵衛に関する記述は、以下の書籍・論文に拠った。砂川幸雄『製陶王国をきずいた父と子・大倉孫兵衛と大倉和親』晶文社、平成十二年七月）、岩切信一郎「大倉書店の形成―大倉孫兵衛の明治期出版動向」（『大倉山論集』五四、五〇四九頁、大倉精神文化研究所、平成二十年三月）、井谷善恵「大倉孫兵衛の軌跡―錦絵出版元ならびに輸出陶磁器メーカーの経営者として」（『大倉山論集』五四、五一〇―一八頁）、前田裕子「大倉孫兵衛・和親の経営行動と近代陶磁器産業の展開―森村組・日本陶器との関わりにおいて」（『大倉山論集』五四、一四九―一八五頁）、田村哲「大倉イズム・製陶王国の礎―父・孫兵衛の志と子・和親らが継いだ功労」（『大倉山論集』五四、一八七―二一〇頁）、平井誠二「晩年の大倉孫兵衛―社会貢献の志とその継承」（『大倉山論集』五四、二二一―二五二頁）、鈴木恵子「近代日本出版史上の大倉孫兵衛」（『大倉山論集』五九、六三―九二頁、大倉精神文化研究所、平成二十五年三月）。
- (5) 森村市左衛門『積富の実験』（大学館、明治四十四年十月）三九―四一頁。
- (6) 「大倉孫兵衛氏紹介の件」（東京商工会議所（経済資料センター）所蔵東京商工会議所関係資料）の「東京商法会議所議員紹介並履歴書綴」。

- (7) 『大倉山論集』六〇（大倉精神文化研究所、平成二十六年三月）三三五～三九二頁。
- (8) 神奈川県立歴史博物館編『真明解明治美術』（神奈川県立歴史博物館、平成三十年八月）一六、四四～四六、一七六～一七七頁。国内外の博物館や美術館のデータベース公開は進んでいるが、版元の情報が欠けているものが多い。公開されている所蔵目録とデータベースでは、明治大学博物館とメトロポリタン美術館が所蔵している。
- (9) 国立歴史民俗博物館・仙台市博物館（大宮司）・神奈川県立歴史博物館・横浜開港資料館・横浜中央図書館・早稲田大学図書館・メトロポリタン美術館の所蔵を確認した。この錦絵には「玉明堂」の版元印も押されている。その他、構図はほぼ同じで、「玉明堂」の版元印のみが押されている「仏蘭西英吉利西三兵大調練之図」がある。
- (10) 前掲注4「大倉書店の形成」一五～一六頁。
- (11) 大西理平編『村井保固伝』（村井保固愛郷会、昭和十八年十月）七九頁。
- (12) 前掲注4「大倉書店の形成」二二頁。なお明治十四年（一八八二）三月刊行の児玉永成編『改正東京案内』の口絵「東京日本橋輻輳の図」と、明治十七年（一八八四）一月に改訂増補された『改正東京案内』の口絵「東京日本橋輻輳の図」の看板がかかっている平屋が描かれている。当該書籍の版元は大倉孫兵衛である。
- (13) 広告「棋嶺百鳥画譜」（『東京日日新聞』明治十四年十一月二十五日、「明治期出版広告データベース」個別広告①〔1A0012918J〕）。
- (14) 前掲注4「大倉孫兵衛の軌跡」六三～六五、七一頁。
- (15) 前掲注4「大倉書店の形成」二五頁。なお、東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』（東京書籍商組合事務所、大正元年十一月）で、創業が「明治八年九月十五日」となっているのは、錦栄堂の創業日ではないかと、岩切氏は推測している。
- (16) 「大修館書店の歩み」(<https://www.taisshukan.co.jp/company/ccel059.html>) 平成三十一年一月五日閲覧。
- (17) 『東京朝日新聞』明治四十一年十月四日朝刊、『読売新聞』同年十月五日朝刊。

- (19) 「建築家の観たる大通の建築（下）」（『東京朝日新聞』明治四十二年（一九〇九）八月二日）。
- (20) 「大倉書店の火事」（『東京朝日新聞』明治四十二年八月十七日朝刊）。なお、『写真タイムス』八（明治製版所、明治四十二年九月）の「銀座の火事と日本橋の火事」に、火災後の本店ビルの写真が掲載されている。
- (21) 『清水組技術部設計建築作品集 事務所之巻』（清水組、大正四年）。
- (22) 「日本橋開通式」（『写真画報グラフィック』三（九）（有楽社、明治四十四年四月十五日））。
- (23) 大倉保五郎及び大倉書店に関する記述は、以下の書籍・論文に拠った。東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』（東京書籍商組合事務所、大正元年十一月）、前掲注4「製陶王国をきざいた父と子」、鈴木恵子「近代日本出版業確立期における大倉書店」（『英学史研究』一八、一〇一〜一〇三頁、昭和六十一年）前掲注4「大倉書店の形成」、前掲注3「近代日本出版史上の大倉孫兵衛」。
- (24) 明治十八年から十九年にかけて刊行された坪内逍遙『新磨妹と背か、み』の奥付では、保五郎の屋号は「含笑堂」となっている。他の事例は管見の限りでは見出せないが、大倉書店等との関係については後考を俟ちたい。
- (25) 服部国太郎が発行人となっているものも古い書籍は、明治三十一年（一八九八）八月刊行の『英文組立 商業通信』である（平成三十一年一月現在）。なお、明治三十四年（一九〇一）九月刊行の紫苑会編『くさぶえ』、翌三十五年八月刊行の精養軒主人述『西洋料理厨の友』は、発行者が服部国太郎で、発行所は「大倉分店」となっている。
- (26) 岩切信一郎『吾輩ハ猫デアル』と服部書店・大倉書店（『一寸』三七、書痴同人、平成二十一年二月）九頁。
- (27) 鈴木敏夫編『回想鈴木一平』（大修館書店、昭和五十二年八月）八頁。
- (28) 松本順吉編『東京名物志』（公益社、明治三十四年九月）一一頁。
- (29) 早川勇「明治中期における「辞書戦争」の書誌的検証―『和訳英字彙』対『和訳字彙』―」（『英学史研究』三一、八五〜九六頁、日本英学史学会、平成十年）。
- (30) 鈴木英夫「ことばの泉」項（沖森卓也ほか編『日本辞書辞典』（おうふう、平成八年五月）一〇五〜一〇六頁）。

- (31) 「歴史を生かす若い人大倉書店の型破り三代目」(『出版情報』五(日本情報社、昭和二十二年六月)一九頁。
- (32) 前掲注23「近代日本出版業確立期における大倉書店」によると、昭和二十七年に出火して書店は焼失したという(二一〇頁)。
- (33) 大倉紙パルプ商事百年史編纂委員会編『大倉紙パルプ商事株式会社百年史』(大倉紙パルプ商事、平成元年十一月)五二〜五三頁。
- (34) 「木津屋宛為替手形」(大倉精神文化研究所蔵資料資75「参考書類」)。
- (35) 白露「森村組の事業及其経営の首脳者」(『実業之日本』九(八)、四四〜四六頁、実業之日本社、明治三十九年四月)。
- (36) 大倉孫兵衛「成功と失敗とは精神の善悪に在り」(『道話』二六、道会、大正二年六月)一四〜一五頁。
- (37) 大倉孫兵衛著、松村介石編『大翁訓話』(道会本部、大正十二年十二月)二四五頁。
- (38) 大倉孫兵衛書翰、成瀬仁蔵宛、大正七年四月(日本女子大学成瀬記念館蔵「旧成瀬記念室資料」1778)。
- (39) 「遺訓」(『大倉陶園廿五年譜紀』(日野厚、昭和十九年十一月))。
- (40) 日本女子大学成瀬記念館編『実践倫理講話筆記明治三十九年度ノ部補遺』(日本女子大学成瀬記念館、平成十九年六月)二三頁。
- (41) 日本女子大学に関する記述は、日本女子大学校編『日本女子大学校四十年史』(昭和十七年、日本女子大学校)に拠った。
- (42) 「予が豊明会を設け公共事業に出兵するに至りし動機」(前掲注5「積富の実験」一二二〜一二七頁)。
- (43) 「日本女子大学校寄附金簿」(日本女子大学成瀬記念館蔵「旧成瀬記念室資料」D2357)。
- (44) 「資金として千円以上寄附金調」(日本女子大学成瀬記念館蔵「旧成瀬記念室資料」D2109-2)。この資料は「昭和四年四月三〇日調」で、森村豊明会からは十一万五千五百円、森村市左衛門・開作親子からは二十七万円が寄附されていることが確認できる。大倉家三代からの寄附金は、大倉孫兵衛夫婦は三万八千五百円、文二は二千五百円、邦彦は二千円となっている。
- (45) 前掲注41『日本女子大学校四十年史』四七〇、五二七〜五二八頁。
- (46) 大倉孫兵衛書翰、成瀬仁蔵宛、(明治)四十四年一月二十四日(日本女子大学成瀬記念館蔵「旧成瀬記念室資料」1328)。

- (47) 大倉孫兵衛書翰、成瀬仁藏宛、(大正)三年二月三日(日本女子大学成瀬記念館蔵「旧成瀬記念室資料」4205)。
- (48) 前掲注40『実践倫理講話筆記 明治三十九年度ノ部補遺』二四頁。
- (49) 前掲注41『日本女子大学校四十年史』三八四頁。
- (50) 大倉孫兵衛書翰、成瀬仁藏宛、(明治)四十五年七月三日(日本女子大学成瀬記念館蔵「旧成瀬記念室資料」3075)。
- (51) 婦一協会は、成瀬仁藏が中心となり、明治四十五年(一九一二年)六月二十日に発足した国際的学術文化交流団体で、宗教・道徳の研究と諸宗教の相互理解・協力の推進を目的に、研究会・出版・公開講演会などの事業を行った。「婦一協会趣旨など昭和一六年一月改訂」(『沿革史資料No.254』21)に収録されている「会員中死亡者」に、孫兵衛と文二の名前がある。
- (52) 牛山幽泉『湯河原温泉療養誌』(渡辺助次郎、明治四十三年七月)二六～二七頁。湯河原の転地療養所は明治四十三年に開設され、翌四十四年六月八日に熱海に移転した(『熱海分院の創設』JACAR (アジア歴史資料センター) RefC13120676800<sup>1</sup> 転地療養記事 大正一年(防衛省防衛研究所)。
- (53) 足堂(松村介石)「湯河原行」(『道』五三、大正元年九月)七三頁。
- (54) 高千穂学園八十年史編集委員会編集『高千穂学園八十年史』(高千穂学園、昭和五十八年五月)二九～三〇頁。高千穂学園は孫兵衛を、「高千穂を育てたひとびと」の一人として位置づけている。また大倉保五郎、大倉和親、大倉邦彦も同校の賛成員を務めている。
- (55) 高千穂学園年史編集委員会編『高千穂学園七十年の歩み』(高千穂学園、昭和五十年十二月)三五頁。
- (56) 前掲注55『高千穂学園七十年の歩み』三五頁。
- (57) 前掲注53「湯河原行」七三頁。
- (58) 神奈川県立図書館蔵「相州湯河原温泉場之真景」(大正十年四月)。前掲注4「晩年の大倉孫兵衛」二二〇～二二二頁。
- (59) 松村介石に関する記述は、松村介石伝編集委員会編『松村介石』(道会、平成元年十一月)。加藤正夫『宗教改革者・松村介石の思想』(近代文芸社 平成八年十月)に拠った。

- (60) 雑誌『道』に関しては、刈田徹「道会機関誌『道』の「解題」ならびに「総目次」——大川周明に関する基礎的研究の一環として——」一（『拓殖大学論集』一五八、一八七〜二三五頁、拓殖大学研究所、昭和六十年十二月）、「同右」二（『同右』一六〇、二〇七〜二四〇頁、同右、昭和六十一年二月）、「同右」三（『同右』一六一、三三三〜六三頁、同右、昭和六十一年七月）、「同右」三（『同右』一六二、三四七〜三八一頁、同右、昭和六十一年十月）、「同右」四（『同右』一六四、三八三〜四一〇頁、同右、昭和六十二年一月）、「同右」五（『同右』一六六、一三三〜一四九頁、同右、昭和六十二年二月）、「同右」六（『同右』一七六、一六九〜二〇五頁、同右、平成元年一月）、「同右」七（『同右』一七八、二七三〜三〇三頁、同右、平成元年三月）、「同右」八（『同右』一七九、二〇五〜二二〇頁、同右、平成元年四月）、「同右」九（『同右』一八〇、二二一〜二四七頁、同右、平成元年五月）、「同右」一〇（『同右』一八二、二四八〜二七四頁、同右、平成元年六月）、「同右」一一（『同右』一八四、二七五〜三〇一頁、同右、平成元年七月）、「同右」一二（『同右』一八六、三〇二〜三二八頁、同右、平成元年八月）、「同右」一三（『同右』一八八、三二九〜三五五頁、同右、平成元年九月）、「同右」一四（『同右』一九〇、三五六〜三八二頁、同右、平成元年十月）、「同右」一五（『同右』一九二、三八三〜四〇九頁、同右、平成元年十一月）、「同右」一六（『同右』一九四、四一〇〜四三六頁、同右、平成元年十二月）、「同右」一七（『同右』一九六、四三七〜五〇三頁、同右、平成二年一月）、「同右」一八（『同右』一九八、五〇四〜五三〇頁、同右、平成二年二月）、「同右」一九（『同右』二〇〇、五三一〜五五七頁、同右、平成二年三月）、「同右」二〇（『同右』二〇二、五五八〜六〇四頁、同右、平成二年四月）、「同右」二一（『同右』二〇四、六〇五〜六五〇頁、同右、平成二年五月）、「同右」二二（『同右』二〇六、六五一〜七〇〇頁、同右、平成二年六月）、「同右」二三（『同右』二〇八、七〇一〜七四七頁、同右、平成二年七月）、「同右」二四（『同右』二一〇、七四八〜七九四頁、同右、平成二年八月）、「同右」二五（『同右』二一二、七九五〜八四〇頁、同右、平成二年九月）、「同右」二六（『同右』二一四、八四一〜八八七頁、同右、平成二年十月）、「同右」二七（『同右』二一六、八八八〜九三四頁、同右、平成二年十一月）、「同右」二八（『同右』二一八、九三五〜一〇〇〇頁、同右、平成二年十二月）、「同右」二九（『同右』二二〇、一〇〇一〜一〇四七頁、同右、平成三年一月）、「同右」三〇（『同右』二二二、一〇四八〜一〇九四頁、同右、平成三年二月）、「同右」三一（『同右』二二四、一〇九五〜一一四〇頁、同右、平成三年三月）、「同右」三二（『同右』二二六、一一四一〜一二〇〇頁、同右、平成三年四月）、「同右」三三（『同右』二二八、一二〇一〜一二四七頁、同右、平成三年五月）、「同右」三四（『同右』二三〇、一二四八〜一二九四頁、同右、平成三年六月）、「同右」三五（『同右』二三二、一二九五〜一三四〇頁、同右、平成三年七月）、「同右」三六（『同右』二三四、一三四一〜一三八七頁、同右、平成三年八月）、「同右」三七（『同右』二三六、一三八八〜一四三四頁、同右、平成三年九月）、「同右」三八（『同右』二三八、一四三五〜一四八〇頁、同右、平成三年十月）、「同右」三九（『同右』二四〇、一四八一〜一五二七頁、同右、平成三年十一月）、「同右」四〇（『同右』二四二、一五二八〜一五七四頁、同右、平成三年十二月）、「同右」四一（『同右』二四四、一五七五〜一六二〇頁、同右、平成四年一月）、「同右」四二（『同右』二四六、一六二一〜一六六七頁、同右、平成四年二月）、「同右」四三（『同右』二四八、一六六八〜一七一四頁、同右、平成四年三月）、「同右」四四（『同右』二五〇、一七一五〜一七六〇頁、同右、平成四年四月）、「同右」四五（『同右』二五二、一七六一〜一八〇六頁、同右、平成四年五月）、「同右」四六（『同右』二五四、一八〇七〜一八五三頁、同右、平成四年六月）、「同右」四七（『同右』二五六、一八五四〜一九〇〇頁、同右、平成四年七月）、「同右」四八（『同右』二五八、一九〇一〜一九四七頁、同右、平成四年八月）、「同右」四九（『同右』二六〇、一九四八〜一九九四頁、同右、平成四年九月）、「同右」五〇（『同右』二六二、一九九五〜二〇四〇頁、同右、平成四年十月）、「同右」五一（『同右』二六四、二〇四一〜二〇八七頁、同右、平成四年十一月）、「同右」五二（『同右』二六六、二〇八八〜二一三四頁、同右、平成四年十二月）、「同右」五三（『同右』二六八、二一三五〜二二〇〇頁、同右、平成五年一月）、「同右」五四（『同右』二七〇、二二〇一〜二二四七頁、同右、平成五年二月）、「同右」五五（『同右』二七二、二二四八〜二二九四頁、同右、平成五年三月）、「同右」五六（『同右』二七四、二二九五〜二三〇〇頁、同右、平成五年四月）、「同右」五七（『同右』二七六、二三〇一〜二三四七頁、同右、平成五年五月）、「同右」五八（『同右』二七八、二三四八〜二三九四頁、同右、平成五年六月）、「同右」五九（『同右』二八〇、二三九五〜二四四〇頁、同右、平成五年七月）、「同右」六〇（『同右』二八二、二四四一〜二四八七頁、同右、平成五年八月）、「同右」六一（『同右』二八四、二四八八〜二五三四頁、同右、平成五年九月）、「同右」六二（『同右』二八六、二五三五〜二六〇〇頁、同右、平成五年十月）、「同右」六三（『同右』二八八、二六〇一〜二六四七頁、同右、平成五年十一月）、「同右」六四（『同右』二九〇、二六四八〜二六九四頁、同右、平成五年十二月）、「同右」六五（『同右』二九二、二六九五〜二七四〇頁、同右、平成六年一月）、「同右」六六（『同右』二九四、二七四一〜二七八七頁、同右、平成六年二月）、「同右」六七（『同右』二九六、二七八八〜二九三四頁、同右、平成六年三月）、「同右」六八（『同右』二九八、二九三五〜三〇〇〇頁、同右、平成六年四月）、「同右」六九（『同右』三〇〇、三〇〇一〜三〇四七頁、同右、平成六年五月）、「同右」七〇（『同右』三〇二、三〇四八〜三〇九四頁、同右、平成六年六月）、「同右」七一（『同右』三〇四、三〇九五〜三一四〇頁、同右、平成六年七月）、「同右」七二（『同右』三〇六、三一四一〜三二〇〇頁、同右、平成六年八月）、「同右」七三（『同右』三〇八、三二〇一〜三二四七頁、同右、平成六年九月）、「同右」七四（『同右』三一〇、三二四八〜三二九四頁、同右、平成六年十月）、「同右」七五（『同右』三一二、三二九五〜三三〇〇頁、同右、平成六年十一月）、「同右」七六（『同右』三一四、三三〇一〜三三四七頁、同右、平成六年十二月）、「同右」七七（『同右』三一六、三三四八〜三四〇〇頁、同右、平成七年一月）、「同右」七八（『同右』三一八、三四〇一〜三四四七頁、同右、平成七年二月）、「同右」七九（『同右』三二〇、三四四八〜三四九四頁、同右、平成七年三月）、「同右」八〇（『同右』三二二、三四九五〜三五〇〇頁、同右、平成七年四月）、「同右」八一（『同右』三二四、三五〇一〜三五四七頁、同右、平成七年五月）、「同右」八二（『同右』三二六、三五四八〜三六〇〇頁、同右、平成七年六月）、「同右」八三（『同右』三二八、三六〇一〜三六四七頁、同右、平成七年七月）、「同右」八四（『同右』三三〇、三六四八〜三六九四頁、同右、平成七年八月）、「同右」八五（『同右』三三二、三六九五〜三七四〇頁、同右、平成七年九月）、「同右」八六（『同右』三三四、三七四一〜三八〇〇頁、同右、平成七年十月）、「同右」八七（『同右』三三六、三八〇一〜三八四七頁、同右、平成七年十一月）、「同右」八八（『同右』三三八、三八四八〜三九〇〇頁、同右、平成七年十二月）、「同右」八九（『同右』三四〇、三九〇一〜三九四七頁、同右、平成八年一月）、「同右」九〇（『同右』三四二、三九四八〜三九九四頁、同右、平成八年二月）、「同右」九一（『同右』三四四、三九九五〜四〇四〇頁、同右、平成八年三月）、「同右」九二（『同右』三四六、四〇四一〜四〇八七頁、同右、平成八年四月）、「同右」九三（『同右』三四八、四〇八八〜四一四〇頁、同右、平成八年五月）、「同右」九四（『同右』三五〇、四一四一〜四一八七頁、同右、平成八年六月）、「同右」九五（『同右』三五二、四一八八〜四二四〇頁、同右、平成八年七月）、「同右」九六（『同右』三五四、四二四一〜四二八七頁、同右、平成八年八月）、「同右」九七（『同右』三五六、四二八八〜四三四〇頁、同右、平成八年九月）、「同右」九八（『同右』三五八、四三四一〜四三九4頁、同右、平成八年十月）、「同右」九九（『同右』三六〇、四三九五〜四四〇〇頁、同右、平成八年十一月）、「同右」一〇〇（『同右』三六二、四四〇一〜四四四7頁、同右、平成八年十二月）、「同右」一〇一（『同右』三六四、四四四八〜四四94頁、同右、平成九年一月）、「同右」一〇二（『同右』三六六、四495〜4540頁、同右、平成九年二月）、「同右」一〇三（『同右』三六八、4541〜4587頁、同右、平成九年三月）、「同右」一〇四（『同右』三七〇、4588〜4634頁、同右、平成九年四月）、「同右」一〇五（『同右』三七二、4635〜4680頁、同右、平成九年五月）、「同右」一〇六（『同右』三七四、4681〜4727頁、同右、平成九年六月）、「同右」一〇七（『同右』三七六、4728〜4774頁、同右、平成九年七月）、「同右」一〇八（『同右』三七八、4775〜4820頁、同右、平成九年八月）、「同右」一〇九（『同右』三八〇、4821〜4867頁、同右、平成九年九月）、「同右」一〇一〇（『同右』三八二、4868〜4914頁、同右、平成九年十月）、「同右」一〇一一（『同右』三八四、4915〜4960頁、同右、平成九年十一月）、「同右」一〇一二（『同右』三八六、4961〜5007頁、同右、平成九年十二月）、「同右」一〇一三（『同右』三八八、5008〜5054頁、同右、平成一〇年一月）、「同右」一〇一四（『同右』三九〇、5055〜5100頁、同右、平成一〇年二月）、「同右」一〇一五（『同右』三九二、5101〜5147頁、同右、平成一〇年三月）、「同右」一〇一六（『同右』三九四、5148〜5194頁、同右、平成一〇年四月）、「同右」一〇一七（『同右』三九六、5195〜5240頁、同右、平成一〇年五月）、「同右」一〇一八（『同右』三九八、5241〜5287頁、同右、平成一〇年六月）、「同右」一〇一九（『同右』四〇〇、5288〜5334頁、同右、平成一〇年七月）、「同右」一〇二〇（『同右』四〇二、5335〜5380頁、同右、平成一〇年八月）、「同右」一〇二一（『同右』四〇四、5381〜5427頁、同右、平成一〇年九月）、「同右」一〇二二（『同右』四〇六、5428〜5474頁、同右、平成一〇年十月）、「同右」一〇二三（『同右』四〇八、5475〜5520頁、同右、平成一〇年十一月）、「同右」一〇二四（『同右』四一〇、5521〜5567頁、同右、平成一〇年十二月）、「同右」一〇二五（『同右』四一二、5568〜5614頁、同右、平成一一年一月）、「同右」一〇二六（『同右』四一四、5615〜5660頁、同右、平成一一年二月）、「同右」一〇二七（『同右』四一六、5661〜5707頁、同右、平成一一年三月）、「同右」一〇二八（『同右』四一八、5708〜5754頁、同右、平成一一年四月）、「同右」一〇二九（『同右』四二〇、5755〜5800頁、同右、平成一一年五月）、「同右」一〇三〇（『同右』四二二、5801〜5847頁、同右、平成一一年六月）、「同右」一〇三一（『同右』四二四、5848〜5894頁、同右、平成一一年七月）、「同右」一〇三二（『同右』四二六、5895〜5940頁、同右、平成一一年八月）、「同右」一〇三三（『同右』四二八、5941〜5987頁、同右、平成一一年九月）、「同右」一〇三四（『同右』四三〇、5988〜6034頁、同右、平成一一年十月）、「同右」一〇三五（『同右』四三二、6035〜6080頁、同右、平成一一年十一月）、「同右」一〇三六（『同右』四三四、6081〜6127頁、同右、平成一一年十二月）、「同右」一〇三七（『同右』四三六、6128〜6174頁、同右、平成一二年一月）、「同右」一〇三八（『同右』四三八、6175〜6220頁、同右、平成一二年二月）、「同右」一〇三九（『同右』四四〇、6221〜6267頁、同右、平成一二年三月）、「同右」一〇四〇（『同右』四四二、6268〜6314頁、同右、平成一二年四月）、「同右」一〇四一（『同右』四四四、6315〜6360頁、同右、平成一二年五月）、「同右」一〇四二（『同右』四四六、6361〜6407頁、同右、平成一二年六月）、「同右」一〇四三（『同右』四四八、6408〜6454頁、同右、平成一二年七月）、「同右」一〇四四（『同右』四五〇、6455〜6500頁、同右、平成一二年八月）、「同右」一〇四五（『同右』四五二、6501〜6547頁、同右、平成一二年九月）、「同右」一〇四六（『同右』四五四、6548〜6594頁、同右、平成一二年十月）、「同右」一〇四七（『同右』四五六、6595〜6640頁、同右、平成一二年十一月）、「同右」一〇四八（『同右』四五八、6641〜6687頁、同右、平成一二年十二月）、「同右」一〇四九（『同右』四六〇、6688〜6734頁、同右、平成一三年一月）、「同右」一〇五〇（『同右』四六二、6735〜6780頁、同右、平成一三年二月）、「同右」一〇五一（『同右』四六四、6781〜6827頁、同右、平成一三年三月）、「同右」一〇五二（『同右』四六六、6828〜6874頁、同右、平成一三年四月）、「同右」一〇五三（『同右』四六八、6875〜6920頁、同右、平成一三年五月）、「同右」一〇五四（『同右』四七〇、6921〜6967頁、同右、平成一三年六月）、「同右」一〇五五（『同右』四七二、6968〜7014頁、同右、平成一三年七月）、「同右」一〇五六（『同右』四七四、7015〜7060頁、同右、平成一三年八月）、「同右」一〇五七（『同右』四七六、7061〜7107頁、同右、平成一三年九月）、「同右」一〇五八（『同右』四七八、7108〜7154頁、同右、平成一三年十月）、「同右」一〇五九（『同右』四八〇、7155〜7200頁、同右、平成一三年十一月）、「同右」一〇六〇（『同右』四八二、7201〜7247頁、同右、平成一三年十二月）、「同右」一〇六一（『同右』四八四、7248〜7294頁、同右、平成一四年一月）、「同右」一〇六二（『同右』四八六、7295〜7340頁、同右、平成一四年二月）、「同右」一〇六三（『同右』四八八、7341〜7387頁、同右、平成一四年三月）、「同右」一〇六四（『同右』四九〇、7388〜7434頁、同右、平成一四年四月）、「同右」一〇六五（『同右』四九二、7435〜7480頁、同右、平成一四年五月）、「同右」一〇六六（『同右』四九四、7481〜7527頁、同右、平成一四年六月）、「同右」一〇六七（『同右』四九六、7528〜7574頁、同右、平成一四年七月）、「同右」一〇六八（『同右』四九八、7575〜7620頁、同右、平成一四年八月）、「同右」一〇六九（『同右』五〇〇、7621〜7667頁、同右、平成一四年九月）、「同右」一〇七〇（『同右』五〇二、7668〜7714頁、同右、平成一四年十月）、「同右」一〇七一（『同右』五〇四、7715〜7760頁、同右、平成一四年十一月）、「同右」一〇七二（『同右』五〇六、7761〜7807頁、同右、平成一四年十二月）、「同右」一〇七三（『同右』五〇八、7808〜7854頁、同右、平成一五年一月）、「同右」一〇七四（『同右』五一〇、7855〜7900頁、同右、平成一五年二月）、「同右」一〇七五（『同右』五一二、7901〜7947頁、同右、平成一五年三月）、「同右」一〇七六（『同右』五一四、7948〜7994頁、同右、平成一五年四月）、「同右」一〇七七（『同右』五一六、7995〜8040頁、同右、平成一五年五月）、「同右」一〇七八（『同右』五一八、8041〜8087頁、同右、平成一五年六月）、「同右」一〇七九（『同右』五二〇、8088〜8134頁、同右、平成一五年七月）、「同右」一〇八〇（『同右』五二二、8135〜8180頁、同右、平成一五年八月）、「同右」一〇八一（『同右』五二四、8181〜8227頁、同右、平成一五年九月）、「同右」一〇八二（『同右』五二六、8228〜8274頁、同右、平成一五年十月）、「同右」一〇八三（『同右』五二八、8275〜8320頁、同右、平成一五年十一月）、「同右」一〇八四（『同右』五三〇、8321〜8367頁、同右、平成一五年十二月）、「同右」一〇八五（『同右』五三二、8368〜8414頁、同右、平成一六年一月）、「同右」一〇八六（『同右』五三四、8415〜8460頁、同右、平成一六年二月）、「同右」一〇八七（『同右』五三六、8461〜8507頁、同右、平成一六年三月）、「同右」一〇八八（『同右』五三八、8508〜8554頁、同右、平成一六年四月）、「同右」一〇八九（『同右』五四〇、8555〜8600頁、同右、平成一六年五月）、「同右」一〇九〇（『同右』五四二、8601〜8647頁、同右、平成一六年六月）、「同右」一〇九一（『同右』五四四、8648〜8694頁、同右、平成一六年七月）、「同右」一〇九二（『同右』五四六、8695〜8740頁、同右、平成一六年八月）、「同右」一〇九三（『同右』五四八、8741〜8787頁、同右、平成一六年九月）、「同右」一〇九四（『同右』五五〇、8788〜8834頁、同右、平成一六年十月）、「同右」一〇九五（『同右』五五二、8835〜8880頁、同右、平成一六年十一月）、「同右」一〇九六（『同右』五五四、8881〜8927頁、同右、平成一六年十二月）、「同右」一〇九七（『同右』五五六、8928〜8974頁、同右、平成一七年一月）、「同右」一〇九八（『同右』五五八、8975〜9020頁、同右、平成一七年二月）、「同右」一〇九九（『同右』五六〇、9021〜9067頁、同右、平成一七年三月）、「同右」一〇一〇〇（『同右』五六二、9068〜9114頁、同右、平成一七年四月）、「同右」一〇一〇〇一（『同右』五六四、9115〜9160頁、同右、平成一七年五月）、「同右」一〇一〇〇二（『同右』五六六、9161〜9207頁、同右、平成一七年六月）、「同右」一〇一〇〇三（『同右』五六八、9208〜9254頁、同右、平成一七年七月）、「同右」一〇一〇〇四（『同右』五七〇、9255〜9300頁、同右、平成一七年八月）、「同右」一〇一〇〇五（『同右』五七二、9301〜9347頁、同右、平成一七年九月）、「同右」一〇一〇〇六（『同右』五七四、9348〜9394頁、同右、平成一七年十月）、「同右」一〇一〇〇七（『同右』五七六、9395〜9440頁、同右、平成一七年十一月）、「同右」一〇一〇〇八（『同右』五七八、9441〜9487頁、同右、平成一七年十二月）、「同右」一〇一〇〇九（『同右』五八〇、9488〜9534頁、同右、平成一八年一月）、「同右」一〇一〇一〇（『同右』五八二、9535〜9580頁、同右、平成一八年二月）、「同右」一〇一〇一〇一（『同右』五八四、9581〜9627頁、同右、平成一八年三月）、「同右」一〇一〇一〇二（『同右』五八六、9628〜9674頁、同右、平成一八年四月）、「同右」一〇一〇一〇三（『同右』五八八、9675〜9720頁、同右、平成一八年五月）、「同右」一〇一〇一〇四（『同右』五九〇、9721〜9767頁、同右、平成一八年六月）、「同右」一〇一〇一〇五（『同右』五九二、9768〜9814頁、同右、平成一八年七月）、「同右」一〇一〇一〇六（『同右』五九四、9815〜9860頁、同右、平成一八年八月）、「同右」一〇一〇一〇七（『同右』五九六、9861〜9907頁、同右、平成一八年九月）、「同右」一〇一〇一〇八（『同右』五九八、9908〜9954頁、同右、平成一八年十月）、「同右」一〇一〇一〇九（『同右』六〇〇、9955〜10000頁、同右、平成一八年十一月）、「同右」一〇一〇一〇一〇（『同右』六〇二、10001〜10047頁、同右、平成一八年十二月）、「同右」一〇一〇一〇一一（『同右』六〇四、10048〜10094頁、同右、平成一九年一月）、「同右」一〇一〇一〇一二（『同右』六〇六、10095〜10140頁、同右、平成一九年二月）、「同右」一〇一〇一〇一三（『同右』六〇八、10141〜10187頁、同右、平成一九年三月）、「同右」一〇一〇一〇一四（『同右』六一〇、10188〜10234頁、同右、平成一九年四月）、「同右」一〇一〇一〇一五（『同右』六一二、10235〜10280頁、同右、平成一九年五月）、「同右」一〇一〇一〇一六（『同右』六一四、10281〜10327頁、同右、平成一九年六月）、「同右」一〇一〇一〇一七（『同右』六一六、10328〜10374頁、同右、平成一九年七月）、「同右」一〇一〇一〇一八（『同右』六一八、10375〜10420頁、同右、平成一九年八月）、「同右」一〇一〇一〇一九（『同右』六二〇、10421〜10467頁、同右、平成一九年九月）、「同右」一〇一〇一〇二〇（『同右』六二二、10468〜10514頁、同右、平成一九年十月）、「同右」一〇一〇一〇二一（『同右』六二四、10515〜10560頁、同右、平成一九年十一月）、「同右」一〇一〇一〇二二（『同右』六二六、10561〜10607頁、同右、平成一九年十二月）、「同右」一〇一〇一〇二三（『同右』六二八、10608〜10654頁、同右、平成二〇年一月）、「同右」一〇一〇一〇二四（『同右』六三〇、10655〜10700頁、同右、平成二〇年二月）、「同右」一〇一〇一〇二五（『同右』六三二、10701〜10747頁、同右、平成二〇年三月）、「同右」一〇一〇一〇二六（『同右』六三四、10748〜10794頁、同右、平成二〇年四月）、「同右」一〇一〇一〇二七（『同右』六三六、10795〜10840頁、同右、平成二〇年五月）、「同右」一〇一〇一〇二八（『同右』六三八、10841〜10887頁、同右、平成二〇年六月）、「同右」一〇一〇一〇二九（『同右』六四〇、10888〜10934頁、同右、平成二〇年七月）、「同右」一〇一〇一〇三〇（『同右』六四二、10935〜10980頁、同右、平成二〇年八月）、「同右」一〇一〇一〇三一（『同右』六四四、10981〜11027頁、同右、平成二〇年九月）、「同右」一〇一〇一〇三二（『同右』六四六、11028〜11074頁、同右、平成二〇年十月）、「同右」一〇一〇一〇三三（『同右』六四八、11075〜11120頁、同右、平成二〇年十一月）、「同右」一〇一〇一〇三四（『同右』六五〇、11121〜11167頁、同右、平成二〇年十二月）、「同右」一〇一〇一〇三五（『同右』六五二、11168〜11214頁、同右、平成二一年一月）、「同右」一〇一〇一〇三六（『同右』六五四、11215〜11260頁、同右、平成二一年二月）、「同右」一〇一〇一〇三七（『同右』六五六、11261〜11307頁、同右、平成二一年三月）、「同右」一〇一〇一〇三八（『同右』六五八、11308〜11354頁、同右、平成二一年四月）、「同右」一〇一〇一〇三九（『同右』六六〇、11355〜11400頁、同右、平成二一年五月）、「同右」一〇一〇一〇四〇（『同右』六六二、11401〜11447頁、同右、平成二一年六月）、「同右」一〇一〇一〇四一（『同右』六六四、11448〜11494頁、同右、平成二一年七月）、「同右」一〇一〇一〇四二（『同右』六六六、11495〜11540頁、同右、平成二一年八月）、「同右」一〇一〇一〇四三（『同右』六六八、11541〜11587頁、同右、平成二一年九月）、「同右」一〇一〇一〇四四（『同右』六七〇、11588〜11634頁、同右、平成二一年十月）、「同右」一〇一〇一〇四五（『同右』六七二、11635〜11680頁、同右、平成二一年十一月）、「同右」一〇一〇一〇四六（『同右』六七四、11681〜11727頁、同右、平成二一年十二月）、「同右」一〇一〇一〇四七（『同右』六七六、11728〜11774頁、同右、平成二二年一月）、「同右」一〇一〇一〇四八（『同右』六七八、11775〜11820頁、同右、平成二二年二月）、「同右」一〇一〇一〇四九（『同右』六八〇、11821〜11867頁、同右、平成二二年三月）、「同右」一〇一〇一〇五〇（『同右』六八二、11868〜11914頁、同右、平成二二年四月）、「同右」一〇一〇一〇五一（『同右』六八四、11915〜11960頁、同右、平成二二年五月）、「同右」一〇一〇一〇五二（『同右』六八六、11961〜12007頁、同右、平成二二年六月）、「同右」一〇一〇一〇五三（『同右』六八八、12008〜12054頁、同右、平成二二年七月）、「同右」一〇一〇一〇五四（『同右』六九〇、12055〜12100頁、同右、平成二二年八月）、「同右」一〇一〇一〇五五（『同右』六九二、12101〜12147頁、同右、平成二二年九月）、「同右」一〇一〇一〇五六（『同右』六九四、12148〜12194頁、同右、平成二二年十月）、「同右」一〇一〇一〇五七（『同右』六九六、12195〜12240頁、同右、平成二二年十一月）、「同右」一〇一〇一〇五八（『同右』六九八、12241〜12287頁、同右、平成二二年十二月）、「同右」一〇一〇一〇五九（『同右』七〇〇、12288〜12334頁、同右、平成二三年一月）、「同右」一〇一〇一〇六〇（『同右』七〇二、12335〜12380頁、同右、平成二三年二月）、「同右」一〇一〇一〇六一（『同右』七〇四、12381〜12427頁、同右、平成二三年三月）、「同右」一〇一〇一〇六二（『同右』七〇六、12428〜12474頁、同右、平成二三年四月）、「同右」一〇一〇一〇六三（『同右』七〇八、12475〜12520頁、同右、平成二三年五月）、「同右」一〇一〇一〇六四（『同右』七一〇、12521〜12567頁、同右、平成二三年六月）、「同右」一〇一〇一〇六五（『同右』七一二、12568〜12614頁、同右、平成二三年七月）、「同右」一〇一〇一〇六六（『同右』七一四、12615〜12660頁、同右、平成二三年八月）、「同右」一〇一〇一〇六七（『同右』七一六、12661〜12707頁、同右、平成二三年九月）、「同右」一〇一〇一〇六八（『同右』七一八、12708〜12754頁、同右、平成二三年十月）、「同右」一〇一〇一〇六九（『同右』七二〇、12755〜12800頁、同右、平成二三年十一月）、「同右」一〇一〇一〇七〇（『同右』七二二、12801〜12847頁、同右、平成二三年十二月）、「同右」一〇一〇一〇七一（『同右』七二四、12848〜12894頁、同右、平成二四年一月）、「同右」一〇一〇一〇七二（『同右』七二六、12895〜12940頁、同右、平成二四年二月）、「同右」一〇一〇一〇七三（『同右』七二八、12941〜12987頁、同右、平成二四年三月）、「同右」一〇一〇一〇七四（『同右』七三〇、12988〜13034頁、同右、平成二四年四月）、「同右」一〇一〇一〇七五（『同右』七三二、13035〜13080頁、同右、平成二四年五月）、「同右」一〇一〇一〇七六（『同右』七三四、13081〜13127頁、同右、平成二四年六月）、「同右」一〇一〇一〇七七（『同右』七三六、13128〜13174頁、同右、平成二四年七月）、「同右」一〇一〇一〇七八（『同右』七三八、13175〜13220頁、同右、平成二四年八月）、「同右」一〇一〇一〇七九（『同右』七四〇、13221〜13267頁、同右、平成二四年九月）、「同右」一〇一〇一〇八〇（『同右』七四二、13268〜13314頁、同右、平成二四年十月）、「同右」一〇一〇一〇八一（『同右』七四四、13315〜13360頁、同右、平成二四年十一月）、「同右」一〇一〇一〇八二（『同右』七四六、13361〜13407頁、同右、平成二四年十二月）、「同右」一〇一〇一〇八三（『同右』七四八、13408〜13454頁、同右、平成二五年一月）、「同右」一〇一〇一〇八四（『同右』七五〇、13455〜13500頁、同右、平成二五年二月）、「同右」一〇一〇一〇八五（『同右』七五二、13501〜13547頁、同右、平成二五年三月）、「同右」一〇一〇一〇八六（『同右』七五四、13548〜13594頁、同右、平成二五年四月）、「同右」一〇一〇一〇八七（『同右』七五六、13595〜13640頁、同右、平成二五年五月）、「同右」一〇一〇一〇八八（『同右』七五八、13641〜13687頁、同右、平成二五年六月）、「同右」一〇一〇一〇八九（『同右』七六〇、13688〜13734頁、同右、平成二五年七月）、「同右」一〇一〇一〇九〇（『同右』七六二、13735〜13780頁、同右、平成二五年八月）、「同右」一〇一〇一〇九一（『同右』七六四、13781〜13827頁、同右、平成二五年九月）、「同右」一〇一〇一〇九二（『同右』七六六、13828〜13874頁、同右、平成二五年十月）、「同右」一〇一〇一〇九三（『同右』七六八、13875〜13920頁、同右、平成二五年十一月）、「同右」一〇一〇一〇九四（『同右』七七〇、13921〜13967頁、同右、平成二五年十二月）、「同右」一〇一〇一〇九五（『同右』七七二、13968〜14014頁、同右、平成二六年一月）、「同右」一〇一〇一〇九六（『同右』七七四、14015〜14060頁、同右、平成二六年二月）、「同右」一〇一〇一〇九七（『同右』七七六、14061〜14107頁、同右、平成二六年三月）、「同右」一〇一〇一〇九八（『同右』七七八、14108〜14154頁、同右、平成二六年四月）、「同右」一〇一〇一〇九九（『同右』七八〇、14155〜14200頁、同右、平成二六年五月）、「同右」一〇一〇一〇一〇〇（『同右』七八二、14201〜14247頁、同右、平成二六年六月）、「同右」一〇一〇一〇一〇一（『同右』七八四、14248〜14294頁、同右、平成二六年七月）、「同右」一〇一〇一〇一〇二（『同右』七八六、14295〜14340頁、同右、平成二六年八月）、「同右」一〇一〇一〇一〇三（『同右』七八八、14341〜14387頁、同右、平成二六年九月）、「同右」一〇一〇一〇一〇四（『同右』七九〇、14388〜14434頁、同右、平成二六年十月）、「同右」一〇一〇一〇一〇五（『同右』七九二、14435〜14480頁、同右、平成二六年十一月）、「同右」一〇一〇一〇一〇六（『同右』七九四、14481〜14527頁、同右、平成二六年十二月）、「同右」一〇一〇一〇一〇七（『同右』七九六、14528〜14574頁、同右、平成二七年一月）、「同右」一〇一〇一〇一〇八（『同右』七九八、14575〜14620頁、同右、平成二七年二月）、「同右」一〇一〇一〇一〇九（『同右』八

- (65) 二宮は安政二年に生れ、明治四十五年（一九一三）一月二十七日に亡くなった。実業界に入り貿易業に従事した一方で、横浜福音会の創立者で、初代会長、勤士、定住伝道師を歴任した。明治二十一年には戸部教会の牧師となった。妻の二宮わかもキリスト教徒で、病院や幼稚園設立など、幅広く社会貢献を行った（日本メソヂスト横浜教会編『日本メソヂスト横浜教会六十年史』日本メソヂスト横浜教会、昭和十二年三月、八四頁）。
- (66) 吉田亮「移民社会とキリスト教―美山貫一のハワイ日本人移民伝道」（『キリスト教社会問題研究』三一、一四一―一八八頁、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、昭和五十八年三月）。「銀座教会百年史」編纂委員会編『銀座教会百年史』（日本基督教団銀座教会、平成六年四月）。同志社大学人文科学研究所編『在米日本人社会の黎明期―「福音会沿革史料」を手がかりに』（現代史料出版、平成九年二月）。
- (67) 大倉文二「如何にして基督信者と為りしや」（『福音新報』六三九、福音新報社、明治四十年九月、二二一頁）。
- (68) 文二の渡米した年月日は不明。前掲注63「大倉洋紙店二代目店主大倉文二」の明治十八年説に従った。
- (69) 阪田安雄ほか編『福音会沿革史料』（現代史料出版、平成九年七月）一二五―一二六頁。同書によると、文二の演説記録は以下のとおり。明治十九年（一八八六）十月十六日の例会で演説（六六頁）、明治二十二年六月二十二日の例会で演説「在留人の商業上に関する意見」（二一九頁）、同年十月二十六日の例会で演説「吾人の輪車を廻転すべし」（二二六頁）、同年十一月二日の天長節祝会で演説「開会の主旨」（二二七頁）、明治二十三年十一月二十七日の国会開会祝会で英語演説（二六五頁）。当研究所との関係では、貴重コレクションの一つである「北島亘寄贈書」の寄贈者北島亘も福音会のメンバーであった（『福音会沿革史料』内田和秀「横浜山手病院について」二二、解説編・北島剛三とその一族（二）、「聖マリアンナ医科大学雑誌」四三、二九三―二九六頁、平成二十八年）。
- (70) 山鹿旗之進編『はりす夫人』（教文館、明治四十四年一月）二五五頁。
- (71) 森永長壹郎「新島襄と森永太郎」（『新島研究』一〇一、同志社大学、平成二十三年二月）三四頁。
- (72) 峯岸英雄「近代日本キリスト教社会貢献論―小林富次郎・黒澤西蔵・森永太郎」（『大倉山論集』六三、大倉精神文化研

究所、平成二十九年三月）一四四頁。

(74) 文二が帰国した年月日は不明である。前掲注63「略歴」に「滯米約六年」とあり、明治二十三年に帰国したと記されているものが多い。ただし前掲注69で触れたように、文二は明治二十三年十一月二十七日に福音会で演説を行っているので、帰国は同年十二月以降から結婚した明治二十五年四月までの間となる。

(75) 古庄正「輸出羽二重工業における近代化過程の特質」〔駒沢大学商経学会研究論集〕六、一五〇～一七三頁、駒沢大学商経学会、昭和四十年十月。

(76) 大倉洋紙店に関する記述は、「大倉洋紙店史」〔昭和十七年、大倉精神文化研究所蔵資料 資57〕、前掲注33『大倉紙パルプ商事株式会社百年史』に拠った。

(77) 前掲注76「大倉洋紙店史」に、「天津市市場紙のみを以て輸入に満足せず、広く貿易に矚目し、先ず天津よりの輸出品として綿花、雑穀、牛皮、牛油等、輸入品として雑貨、砂糖、麦粉及雑綿布類等、研究取引を開始するに至れり」とある。

(78) 前掲注21『清水組技術部設計建築作品集 事務所之巻』。

(79) 「大倉洋紙店の新築落成」〔紙業雜誌〕五（七）、日本製紙聯合会、明治四十三年九月）五四～五五頁。

(80) 『官報』一五三二号（大正六年九月七日）。

(81) 株式会社大倉洋紙店『大正七年上半年 事業報告書』（大正七年六月）。以下、定款や営業報告などは「企業史料統合データベース」で閲覧した。

(82) 大正会に関する記述は、王子製紙株式会社販売部調査課編『日本紙業綜覧・昭和十二年版』（王子製紙、昭和十二年）三五五～三五八頁、前掲注33『大倉紙パルプ商事株式会社百年史』に拠った。

(83) 小倉製紙工場に関する記述は、村田辰蔵編『小倉製紙工場沿革概要』（村田辰蔵、大正十三年四月）に拠った。

(84) 『官報』一一六一号（大正五年六月十五日）、一四七二号附録（大正六年六月二十八日）。

(85) 立山製紙株式会社に関する記述は、香川忠夫「創立時の立山製紙株式会社に関する一考察」〔越中史壇会「富山史壇」一二七、

- 二七～三九頁、平成十年十一月)、立山製紙社史編集事務局編『立山製紙八十五年史』(立山製紙、平成十六年十月)、松本和明「金山従革の企業者活動…立山(軽便) 鉄道と立山製紙の設立と経営を中心に」(『鉄道史学』三〇)、鉄道史学会、一五～二五頁、平成二十四年十月)に拠った。
- (86) 『官報』一五八一号(大正六年十一月八日)。
- (87) 『株式会社杉浦鉄工場定款』(大正六年八月)、『第一回営業報告書』(大正六年十二月二十一日)。同社には大倉和親も出資している。
- (88) 日本金網社史編纂委員会編『五十年の歩み』(日本金網、昭和四十一年九月)三七～四二頁。
- (89) 芹川醒編『株式会社南亜公司沿革』(芹川醒、昭和十三年三月)。文二以外の取締役は、森村開作、川崎栄助、井上雅二、法華津孝治。監査役には藤井諸照、永井儀三郎が選ばれている。なお全株数一万株に対して文二は二百株で、孫兵衛も千株、保五郎も百株を出資している。
- (90) 『官報』一四五〇号(大正六年六月二日)。設立日は大正六年五月二十一日。
- (91) 大正六年(一九一七)十月八日付の外務省通商局長中村巍宛願書(「各国ニ於ケル染料製造業ニ関シ報告ノ件」)(ACAR(アジア歴史資料センター) Ref:B11100906300 塗料及染料関係雑件 第二卷(B3-54139\_002)(外務省外交史料館))。
- (92) 前掲注76「大倉洋紙店史」。
- (93) 「日新青年倶楽部設立」(『東京朝日新聞』明治三十九年十二月二十六日朝刊)。他の賛同者は、森村市左衛門、和田劍之助、清水豊三郎。
- (94) 「日新青年倶楽部創立趣意書並に規則」(東京商工会議所(経済資料センター)所蔵東京商工会議所関係資料902「雑要書類明治四十二年七月～四十二年十二月」)。
- (95) 前掲注63「略歴」。
- (96) 「日本橋青年倶楽部規則」(東京商工会議所(経済資料センター)所蔵東京商工会議所関係資料902「雑要書類明治四十二年

七月〜四十三年十二月)。

(97) 「実業青年倶楽部」(右同)。この史料は入会申込書である。文二は評議員として名を連ねている。この他の評議員は、飯田連庫(塗料問屋)、和田富次郎(羅紗業)、田尻武次、田島為助(機械金物商)、中村新吉、中島石松(絵葉書図書出版・松聲堂)、安野謙(岩井商店)、小林富次郎(小林富次郎商店・ライオン創業者)、清水豊三郎。幹事は山本邦之助と吉川由己。

(98) 大倉文二「事業経営上の理想」(前掲注62「残月」)。

(99) 銀座教会に関する記述は、吉岡誠明編『日本メソヂスト銀座教会歴史』(杉原正四郎、昭和五年十一月)、「銀座教会百年史」編纂委員会編『銀座教会百年史』(日本基督教団銀座教会、平成六年四月)に拠った。なお、それ以前に文二が所属していた教会は不明。

(100) 銀座教会編『銀座教会五十年史』(銀座教会、昭和十六年二月)二二四頁。

(101) 現在確認されているのは、以下の通り(典拠は、護教社刊行の機関紙『護教』)。大正五年二月十一日の信徒大会(神田三崎町三崎会館・演題不明)、同年八月二十日の共励会(銀座教会・演題「奮闘努力」)、大正六年三月二十九日の歓迎会(銀座教会・演題不明(欧米諸国漫遊の感想))、同年四月十五日の商工青年十五日会(神田青年会館・演題「欧米視察所感」)、同年八月八日の共励会(銀座教会・演題「欧米視察談」)、大正七年七月十五日の第五回商工青年慰安会(本所基督同胞教会・演題「成功の秘訣」)。

(102) 「日本橋メソヂスト教会」(『護教』一四〇二、護教社、大正七年六月二十八日)、「銀座教会―追悼会」(『護教』一四六六、護教社、大正七年十月四日)。

(103) 日本における禁酒運動の草創期の主要メンバーには、文二の渡米にも大きく関わった美山貫一がいる。文二の禁酒運動への関心はこうした人間関係も少なからず影響していると思われる。

(104) 松本ピアノに関する記述は、松本雄二郎「明治の楽器製造者物語・西川虎吉 松本新吉」(松本雄二郎、平成九年六月)、松本ピアノオルガン保存会「松本ピアノの歴史」(松本ピアノオルガン保存会、平成二十四年一月)に拠った。銀座教会の教会堂

改築に際し、松本も建設委員・建築費募集員を務めている。

(105) 共同出資者であった和田は霊岸島病院長で、銀座教会に所属していた(前掲注99『日本メソジスト銀座教会歴史』)。

(106) 大倉書店からの出向とする根拠は、芝と山本の住所が「日本橋区通一丁目十九番地」となっていることである(前掲注104『明治の楽器製造者物語』二〇四―二〇五頁、『松本ピアノの歴史』四九頁)。しかし登記変更の時点では、大倉書店と大倉洋紙店の事務所は住所地の同じビル内にあった(本文93頁)。また、山野は大正七年(一九一八)に刊行された文二の母益子の遺稿歌集『ますかゝみ』の発行者で、奥付の肩書は「株式会社大倉洋紙店」となっている。

(107) 「安孫子久太郎身元引受書」(大倉精神文化研究所蔵資料資料75「参考書類」)。

(108) 山野政太郎編『"RONGO" in English, Japanese, and Chinese』(松本楽器合資会社、大正二年二月)序文。

(109) 以上の安孫子に関する記述は、鈴木麻倫子「安孫子家文書から見る安孫子久太郎と須藤奈奈子の出会い」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要、史学編』一五、五五―八六頁、平成二十八年三月)に拠った。なお、同「安孫子家文書から見る桑港日本人YWCAの設立過程」(『同上』一六、一―三二頁、平成二十九年三月)によると、大正二年三月、安孫子の妻奈子がキリスト教女子青年会の運営資金を調達するために帰国した際にも、文二が森村市左衛門や孫兵衛を紹介している。

(110) 「受領書」(大倉精神文化研究所蔵資料資料75「参考書類」)。大正二年五月三十一日付で、金百五十一円四十九銭の受領書である。おそらく何かしらの寄附であろう。

(111) 青山学院に関する記述は、青山学院五十年史編纂委員会編『青山学院五十年史』(青山学院、昭和七年十一月)に拠った。

(112) 「青山学院拡張之趣旨」(『青山学報』一、青山学院学報局、大正五年七月十日)。

(113) 「校友送迎及び祝賀会」(『青山学報』七、青山学院学報局、大正七年五月三十日)。

(114) 「ハリス監督移転」(前掲注113『青山学報』七)、「新築の「心」の家に 伝道の美果を楽しむハリス老監督」(『読売新聞』大正七年三月十五日付朝刊)。

(115) 「評議員囑託」(前掲注113『青山学報』七)、青山学院編『青山学院一覽、大正十四・十五年度』(青山学院、大正十五年十一

月)一五頁。

(116) 「大倉文二氏の永眠」(『護教』一四〇六、護教社、大正七年七月二十六日)。

(117) 本節は、前掲注63「略歴」、前掲注116「大倉文二氏の永眠」、「嗚呼大倉文二君卒然永眠」(『紙業雜誌』一三(六)、日本製紙聯合会、大正七年八月五日)に拠った。

(118) 「青山学院通信」(『護教』一四〇七、護教社、大正七年八月二日)。

(119) 「銀座教会・追悼会」(『護教』一四一六、護教社、大正七年十月四日)。当日、邦彦は遺言に基づいて銀座教会へ金三千円、日本橋教会へ金二千円の寄附を申し出ている(前掲注99『日本メソヂスト銀座教会歴史』一五九―一六〇頁)。

(120) 大倉邦彦に関する記述は、前掲注33「大倉紙バルブ商事株式会社百年史」、大倉精神文化研究所編『大倉邦彦伝』(大倉精神文化研究所、平成四年三月)に拠った。

(121) 「大倉洋紙店第貳回事業報告書 大正七年下半年期」(大正七年十二月)。

(122) 「朝日新聞」大正十二年九月二十二日付朝刊。

(123) 「大倉洋紙店第十二回事業報告書 大正十二年下半年期」(大正十二年十二月)。

(124) 「大倉洋紙店第十六回營業報告書 大正十四年下半年期」(大正十四年十二月)。

(125) 「大倉洋紙店第拾八回營業報告書 大正十五年下半年期」(大正十五年十二月)。

(126) 五輪堂に関する記述は、前掲注33「大倉紙バルブ商事株式会社百年史」(三〇八―三四四頁)に拠った。

(127) 「有限会社五輪堂定款」(大倉精神文化研究所蔵資料資料92「五輪堂洋紙店」)。

(128) 詳しくは、本論集に収録されている「大倉邦彦の社会貢献とその理念―新出資料の翻刻紹介―」を参照。『学友会名簿』(沿革史資料No.127(14))によると、邦彦は聴講生で、産業能率短期大学第一期生となっている。同校は昭和二十五年(一九五〇)に設立された。

(129) 「三億の債務を二年半で完済(大倉洋紙)」(日本経営協会編『事務と経営』一一(一一二)、日本経営協会総合研究所、昭和

三十四年)。

- (130) 沿革史資料No.2811の6。大正十三年(一九二四)二月十八日に東京銀行集会所で開催された晩餐会のものと推定される。
- (131) 沿革史資料No.2811の8。京都・知恩院の三門前にて撮影されている。
- (132) 「国際ロータリー第七十区クラブ会員名簿(昭和五年八月)」(沿革史資料No.12653)。
- (133) 「大倉精神文化研究所新築工事 上棟式参列者人名簿及職業別名簿」(沿革史資料No.3571)によると、米山は昭和六年四月九日の上棟式に参加している。
- (134) 佐佐木信綱が主宰する和歌結社「竹柏会」の雑誌『心の花』に、米山梅吉の和歌がいくつか掲載されている。同雑誌には、当研究所本館(現横浜市大倉山記念館)を設計した長野宇平治の和歌も掲載されている。また邦彦とも交流があり、当研究所には佐佐木の自筆書簡が現存している(平尾直樹「建築家長野宇平治の短歌」(『大倉山論集』)五六、七九―一一八頁、大倉精神文化研究所、平成二十二年三月)。
- (135) 日本工業倶楽部に関する記述は、日本工業倶楽部編『日本工業倶楽部廿五年史』(日本工業倶楽部、昭和十八年十二月)に拠った。
- (136) 木内信胤「九日会始末記」(『会報』一四六、社団法人日本工業倶楽部、昭和六十三年七月)。同会は昭和六十二年十一月三十日に解散した。
- (137) 「皇紀二千五百九十二年(昭和七年度)私の使命事業」(沿革史資料No.208)。
- (138) 富士見幼稚園については、大岡紀理子・大岡ヨト「昭和初期の保育の実際に関する一考察―大倉邦彦の教育理念と特別活動的視点―」(『大倉山論集』六二、一九―五二頁、大倉精神文化研究所、平成二十八年三月)、林宏美「大倉邦彦と富士見幼稚園二〇年のあゆみ・戦前・戦中の私立幼稚園の資料から」(『同上』六一、七七―一〇五頁)を参照。
- (139) 農村工芸学院については、平井誠二「農村工芸学院と大倉邦彦」(『大倉山論集』四五、四九―一〇七頁、大倉精神文化研究所、平成十二年三月)参照。

- (140) 邦彦と東洋大学については、三浦節夫「東洋大学学長 大倉邦彦」〔大倉山論集〕五〇、三七〜六一頁、大倉精神文化研究所、平成十六年三月）、豊田徳子「大倉邦彦の東洋大学運営―その方針・施策と結果―」〔同上〕、六三〜一二七頁）参照。
- (141) 前掲注4「晩年の大倉孫兵衛―社会貢献の志とその継承―」二一六〜二二一頁。以下、それぞれに関連する孫兵衛の言葉を掲げておく。①「自分が身を賭して遣り出した事で遣り遂げ得なかつた事は一つもない、小さいながらも思い立つた事は皆成功して居る。」（大倉孫兵衛「予の信仰前の処世観と信仰後の処世観」〔道〕三九、明治四十四年七月）。②「何れの業を為すにも皆天の命である。天然自分に授かりし仕事と心得ることが第一である。」（同「天から授かりし仕事」〔道話〕六、明治四十四年六月）。③「苟もその動機が一個の私欲野心でなく又その努力が飽くまで正直誠実である限りは、人間の思ひ立つ事は、如何に難事業であろうとも成就し得ない筈はない。」（同「予の信仰前の処世観と信仰後の処世観」）。④「己の衣食住を全ふし妻子を養ふ事が出来たれば、此外には事業を立派にして永世不朽の国を富ますの道をなすことと、他人を愛する事を為すことが此世に生れ来たりし人間の役と思ふ。」（同「富まむ、富みて」〔道話〕四六、大正四年二月）。⑤「無利息で政府の金を借りて、外国の商売をすると、（中略）大切な商売に独立が出来ぬ事になる。いやでもお役人の為に曲げねばならぬ事が出来ると、真剣に商売ができなくなる。（中略）因て真剣に商売をするつもりならば、政府などより金を借らず、一文無しで苦しんで働かなければならぬ。」（同「天恩に感謝す」〔道話〕五六、大正四年十二月）。
- (142) 前掲注63「大倉洋紙店二代目店主大倉文二」二六七〜二七〇頁。
- (143) 大倉文二「事業経営上の理想」〔前掲注62「残月」〕。
- (144) 大倉孫兵衛「出世の鏡」〔道話〕七八、大正六年十月、一二頁。
- (145) 大倉文二「成功の真意義」〔道話〕五四、大正四年十月、五一頁。
- (146) 『商売往来』（沿革史資料No.133）。
- (147) 大倉孫兵衛「知らぬが仏（一）孫婚に送りし文」〔道話〕三〇、大正二年十月、五五〜五六頁。
- (148) 大倉文二「商業人の自覚」〔道話〕五一、大正四年七月、三六〜三七頁。

(149) 「神ながらの商売道」(大倉邦彦『感想(其十)』私家出版、昭和九年二月)。

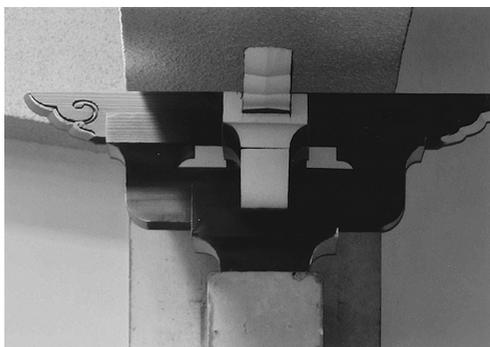
(150) 大倉邦彦『感想(其六)』(私家出版、昭和五年二月)。本文は「農夫が田を耕すは、自ら食ふ為ではない。人に食はせんが為だと考へるのが妥当であり、高尚である。其間に自ら食ふのは、生きて耕し、人に食はせん為の道行きに過ぎない。官吏も、宗教家も、実業家も斯くあり度い。」。

(151) 「目的を見失つてはならぬ」(大倉邦彦『感想(其九)』私家出版、昭和八年二月)。

(付記) 本稿脱稿後に、宗教学法人道会から拝天堂に関してご教示を賜り、また関係写真の提供を受けた。改めて感謝申し上げますとともに、ここに掲載したい。



額「拜天堂」（波辺国武筆）



旧拜天堂にあった三斗

新しい拜天堂内で見ることができる。



旧拜天堂入口に置かれていた踏石

現在、池の飛び石として利用されている。